
絶対防御の主人公

十六夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対防御の主人公

【Nコード】

N7176R

【作者名】

十六夜

【あらすじ】

前回書いている途中でこのサイトを退会してしまい、お気に入り登録して下さった皆様方に大変ご迷惑をおかけしました。

友達からの希望、そして応援で再びこの作品を復活させる事になりました。今回は前作での失敗も踏まえ、最初から書き直す事にいたしました。

更新速度は遅いですが、それでも読んでいただければ幸いです。

登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介はあった方がいいという意見があったので、投稿する事にしました。

読み飛ばしても大丈夫です。

ネタバレを含んでおり、さらに登場人物が増えることに更新していく事になると思います。

2011年8月4日

Fクラス第一チームメンバー追加

登場人物紹介

カオル・L・A・シンフォニー（カオル・ラスト・アパスル・シンフォニー）

種族 不明

歳 一六歳

身長 一八一センチ

体重 六一キロ

髪色 月白

容姿 上の下

属性 拒絶

魔法タイプ 防御魔法

タイプ別型 絶対拒絶型

武器 野太刀・刃物全般・暗器・銃

趣味 本を読む事、音楽鑑賞、修業

好きなモノ 甘い物、安眠枕、武具、家事全般

嫌いなモノ　辛い物、五月蠅い奴、睡眠を邪魔するモノ

キャラ紹介

普段は穏やか。しかし、睡眠を邪魔されると容赦なく攻撃する。オッドアイで右目だけが赤色。女子に耐性が無く、クラスでは平気ぶっているが内心気絶しそうなくらいきつい。

先生からもらった本の武術を習得するために最近では修業を行っている。貰ったその日でかなり使いこなせるようになる位武のセンスはある。本人曰くこの武術がしつくりきたとの事。修業をやらない日は基本的に寮で寝ている。

種族が不明なのは物心がつく前に親が死んだからである。魔力量がケタ外れて高いので人間、獣人、魔人のどれかだとは思うが本人すらそれを知らない。

戦い方の紹介

拒絶障壁を飛んで来たモノを弾き返したり、自ら上に刃物を投げそれを弾く事で攻撃をする。拒絶魔法は攻撃にも使えるが、本人はまだそれを使えない。

絶対領域を張っており、大概の魔法は防ぐ事が出来るが、障壁に使っている魔力量より多い魔力量の魔法が来たら破られる。しかし、魔力量だけは異常と言えるレベルを持っているのでまず破られる事はないだろう。

シン・ステファニー

種族　獣人

歳　十六歳

身長 一七四センチ

体重 六三キロ

髪色 茶

容姿 上の中

属性 風・雷

魔法タイプ 攻撃魔法

タイプ別型 障壁破壊前衛型

武器 大剣

趣味 戦う事、食べる事、ゲーム

好きなモノ カナ（彼女）、仲間、食べ物

嫌いなモノ カナや仲間を傷つける者、怖いモノ（幽霊等）

キャラ紹介

どちらかと言えばクールな方。しかし、幽霊等が苦手と言う情けない一面も持つ。カナ・クロイツンと付き合っていて、カナが傷つけられたり、カナに対し色目を使う奴には容赦ない。食べる事が好きだが体重は平均的である。どれくらい食べるかと言うと、一食平均で炊飯器一杯分位。しかし、本気を出せばこれの三倍は食べれるとか。学校から近くの商店街の飲食店では“バイキングキラー”や“食べ放題の魔王”等の異名が付けられている。何やら隠し事がある

るらしい。

狼の獣人で身体能力は高い。しかし、獣人だからといって耳が付いていたりなどはない。獣化をすれば狼にも、漫画で出てくるように一部を獣化する事も出来る。

戦い方の紹介

自らの身体強化魔法を使い、身体を強化し相手に突っ込んでいき相手の障壁を無視して大剣を振り下ろす力任せのスタイル。魔法の詠唱速度も速く、無詠唱で中級魔法も使える。

さらに、部分獣化により圧倒的な力で相手を叩き潰す事も出来る。しかし本人は獣化するのは腹が減るから嫌だとか。

カナ・クロイツン

種族 獣人

歳 十六歳

身長 一六九センチ

体重 五四キロ

スリーサイズ 八三 五八 八五

髪色 黒

容姿 上の上

属性 土

魔法タイプ 攻撃魔法

タイプ別型 拡散重視中衛型・大魔法用後衛型（主に大魔法用後衛型）

武器 杖

趣味 情報収集、料理、物作り

好きなモノ シン（彼氏）、情報源、廃墟

嫌いなモノ シンや友達を傷つける者、いじめ

キャラ紹介

特徴的なしゃべり方で周りの雰囲気盛り上げる少女。シン・ステファニーと付き合っており、シンにゾッコンである。料理が得意で何時もシンの弁当などを作っている。廃墟が好きと変わっており、怖いモノが苦手なシンにとっては結構きついらしい。自分の部屋も一部廃墟の様な感じにしているとか。

鳥の獣人で、部分獣化する事も可能だとか。

戦い方の紹介

後衛で大魔法を撃ち、相手が近付いてきたら、拡散型の中衛魔法に切り替えるといった独特の戦い方をする。大魔法を使うとき詠唱ありだが最上級魔法も使えるらしい。しかし、無詠唱ならば中級の拡散魔法が限界だ。

部分獣化で翼を生やし、空からの魔法攻撃をする事もある。

レナ・Y・アストレイ（レナ・ユグドラシル・アストレイ）

種族 魔人

歳 十六歳

身長 一五五センチ

体重 四四キロ

スリーサイズ 七二・四七 七〇

髪色 灰銀

容姿 上の上

属性 主に闇（しかし、完全の三つ以外なら全て使える）

魔法タイプ 召喚魔法

武器 銃

趣味 お昼寝、日向ぼっこ

好きなモノ 友達、カオル、可愛いモノ

嫌いなモノ 辛いモノ、いじめ

キャラ紹介

一言でいえば無口な少女。身長が低い事と胸が小さい事を気にし

ている。数多くの召喚獣と契約を交わしているため、創造、拒絶、時空の完全以外の属性は全て使える。しかし、元々闇しか使えなかったので、自分で魔法を使うとしたら闇属性だ。カオルに好意を抱いている少女の一人。

サリエル
墮天使の魔人でその力の一部が使える。魔人だからといって魔神化しなければ、見た目は普通の人間と何ら変わりはない。

戦い方の紹介

召喚魔法を主とした戦い方。召喚獣を一遍に二、三体平均してだし、相手を囲んで一斉に攻撃をする。魔力が多く、一般人が百の魔力を持っていたとしたら、レナは十万の魔力を持っている（カオルは一億程だが）。故に、一遍に多くの召喚獣を出しておける。

魔神化により、自らの身体能力や魔法能力を上げる事も出来る。イビル・アイ
サリエルの力の邪視イビル・アイが使えるようになるが、サリエルの様に見たモノを殺すのではなく、見たモノから魔力を奪うと言う感じに変換されている。それ以外にも邪視の能力はあるらしい。

アリア・ファイリー

種族 人間

歳 十六歳

身長 一六八センチ

体重 五四キロ

スリーサイズ 九一、六三、九二

髪色 オレンジ

容姿 上の中

属性 炎

魔法タイプ 攻撃魔法

タイプ別型 障壁破壊前衛型

武器 槍

趣味 買い物、勉強

好きなモノ 仲間、カオル？、ゲーム

嫌いなモノ 人の死、ナンパ

キャラ紹介

正直になりきれない少女。自分の気持ちを伝える事が下手である。レナほどでは無いが、カオルに好意を持っているようだ。しかし素直になりきれないため、思いを伝える事は難しいだろう。プライドはどちらかと言えば高く、他人に負けないようによく努力をしている。勉強も出来るので結構頼りになる。

戦い方の紹介

シンと同じで相手の障壁を破壊するために前衛に突っ込む。しかし、槍なので力押しではなく頭も使い、障壁を破壊することに専念する。使用できる魔法も多く、その気になれば中衛での攻撃も可能。しかし本人は前衛が好きなので、中衛に回る事は無い。

ミリア・スレリア

種族 神人と人間のハーフ

歳 十六歳

身長 一六五センチ

体重 四九キロ

スリーサイズ 九五 六二 九〇

髪色 ピンク

容姿 上の上

属性 水・雷・光

魔法タイプ 回復魔法

タイプ別型 魔力回復型・回復特化型

武器 弓

趣味 料理、魔法薬の勉強、裁縫

好きなモノ 日記、植物、カオル？

嫌いなモノ 怖いモノ、ナンパ、いじめ

キャラ紹介

ふだんは優しいが、恋に関しては少し病んでいる部分を持つ少女。胸が大きく、男性からイヤラシイ目で見られるのを気にしている。しかし、アリアとよく一緒にいるのでそう言う男は大概アリアに追いついてしまふ。カオルに助けてもらった時から、少しカオルの事が気になっているようだ。

神人よりのハーフなのだが、育った環境が魔法使いばかりだったので魔法を使う事になった。

戦い方の紹介

主に後衛で味方に回復魔法をかける役。しかし、それ以外の時は持ち前の弓に自分の魔力で作った矢を放ち攻撃している。弓には仕掛けがあり、真中から別れ双剣にする事も出来て、近づいてきた敵はこれで斬り倒す。普通に魔法も使え大概は、戦いの補助をしている。

神人としての能力もあり、科学的な魔法攻撃も可能である（弓矢を利用し、雷属性の魔力を使ったレールガンなど）。

シンヤ・クドウ・ラヴァインファン

種族 魔人

歳 二十五歳

身長 一八七センチ

体重 七五キロ

髪色 黒

容姿 上の下

属性 炎・風・雷・血

魔法タイプ なし（一応、攻撃魔法）

タイプ別型 なし（一応、障壁破壊前衛型）

武器 ナックルダスター

趣味 睡眠、寝る事、昼寝

好きなモノ 安眠枕、ベッド、抱き枕

嫌いなモノ 睡眠を邪魔するモノ、面倒くさい事、生徒を傷つける者

キャラ紹介

一言でいえば面倒くさがり。自分から面倒事に首を突っ込む事は余りない。しかし、自分の生徒が関与した場合は全力を出す。教師としては生徒に恐怖を与えることで黙らせたりする事もある。しかし、教師としての人気は高い。少しバトルジャンキーな一面も・・・そのせいで一部の生徒からは“眠れる魔王”と恐れられている。

鬼（酒吞童子）の魔人で身体能力は飛びぬけて高い。魔力は普通だが妖力と言う別の力も持つ。

戦い方の紹介

魔法タイプもタイプ別型も決まっては無く、攻撃魔法だろうが防御魔法だろうが回復魔法だろうが全てが使える。学生だったころは一応、攻撃魔法の障壁破壊前衛型だったらいい。一瞬で間合いを詰め、魔法で強化した拳を相手に叩きこむ。パワーもスピードもあり、殆ど隙が無い。

魔神化をしなくても圧倒的なパワーがあるが、それをする事によりさらに強くなる。魔神化、もしくは部分魔神化する事により彼の攻撃は全てが一撃必殺レベルまで跳ね上がる。また、妖力を使った身体強化も可能になる。

狂咲くるいざき
歎なげき

種族 人間

歳 十六歳

身長 一七一センチ

体重 四九キロ

髪色 黒

容姿 中の上

能力 出才チ

能力タイプ 因果律干涉

武器 鈍器全般

趣味 ゲーム、音楽鑑賞

好きなモノ 魔法が使えない人、能力者

嫌いなモノ 魔法が使えないと言っただけで蔑む者

キャラ紹介

何だ、何だよ、何ですかの様に三段活用？ を口癖としてキャラを作っている少年。カオルとリリナの幼なじみ。魔法が使えない落ちこぼれとして扱われていたが、異能力を持っており、学生レベルなら簡単に殺す事もできる。

能力の紹介

能力名は出オチとふざけているように見えるが、その力は因果律を反転させると言うバグキャラの様な能力。

因果律の反転とは、例えばビルが老朽化により倒壊したと言う事が起こったとする。これはビルが老朽化すると言う原因が、ビルの倒壊と言う結果の関係となる。しかしこの能力を使い因果律を反転させれば、ビルの倒壊ため、老朽化したと言うようになる。

リリナ・ヴァンウィンクル・クルセイディア・オーディアン

種族 人間

歳 十六歳

身長 一五九センチ

体重 四六キロ

スリーサイズ 八五 五五 八三

髪色 緑

容姿 上の中

能力 人形遣い

能力タイプ 物理干涉

武器 糸系統全般

趣味 人形作り、読書

好きなモノ 人形、本、料理

嫌いなモノ 魔法が使えないと言っただけで蔑む者

キャラ紹介

人形作りが趣味と言うとても器用な少女。カオルと歎の幼なじみ。歎と同じく魔法は使えないが異能力を持っている。魔法が使えないが容姿はかなり良く、学生の中で少し実力を持った奴に犯されそうになる事も良くあるが、返り討ちにしている。

能力の紹介

能力名の人形遣いがそのままの能力ととらえても良い。能力により指先から出される糸を使い人形を操ったり、敵を捕えたりする事が出来る。糸の強度や細さ、長さは自在に変える事が出来るため、

糸で物を切断する事も可能。

能力が能力の為前衛で戦う事は絶対にならないが、人形を操り前衛で戦う事も可能である。

王黒竜わんへいろん

種族 魔人

歳 十六歳

身長 一八三センチ

体重 六九キロ

髪色 赤

容姿 中の中

能力 魔穿鉄拳

能力タイプ 物理干涉

武器 手甲

趣味 武術の修業、中華料理の食べ歩き

好きなモノ 中華料理

嫌いなモノ 魔法が使えないと言っただけで蔑む者

キャラ紹介

セルシニア国内にある十二の公国の一つ、中華公国から来た少年。喋り方に少し特徴があるが、かなりのイケメンで体つきも良いことから一部女子に人気がある。魔法は使えないが中華公国建国時から伝わる武術で、免許皆伝の実力を持っている。

ゼルエル 天使の魔人で身体能力がかなり高い。魔力は皆無だが、それに見合う身体能力が備わっている。

能力の紹介

能力名は魔穿鉄拳。魔を穿つ鉄拳と書くだけあり、魔法を中心として攻撃する者にとっては天敵ともいえる能力である。魔力により創り出されたモノを破壊する事が出来るため、障壁なども軽々と破壊してしまう。

前衛で相手の障壁を破壊し、自らの武術により攻撃をするという典型的な障壁破壊前衛型である。

エミリー・リップル

種族 人間

歳 十六歳

身長 一六九センチ

体重 五六キロ

スリーサイズ 九五 六一 九二

髪色 青

容姿 上の下

能力 串刺好くしきじょう

能力タイプ 魔法干涉

武器 槍

趣味 スイーツの食べ歩き、ウィンドウショッピング

好きなモノ スイーツ全般、串刺のモノ

嫌いなモノ 魔法が使えないと言っただけで蔑む者

キャラ紹介

趣味だけを見ると普通の少女。リリナと同じく、魔法が使えないことから犯されそうになる事が何回もあったが、その度に振り返りにし、犯そうとしてきた相手を串刺にして放置している。今のところ串刺にされ死んだ者はいない。

能力の紹介

能力名は串刺好。自らの槍が刺さった相手に、銀の巨大な針を突き刺すと言う、えげつない能力である。針を刺す場所の指定は心臓や頭等、命に直接かわってくる所以外であればどこでも指定する事が出来る。

サーシャ・プロテイト

種族 人間

歳 十六歳

身長 一四九センチ

体重 四十キロ

スリーサイズ 七二 五三 六九

髪色 藍

容姿 上の中

能力 亡飲亡喰

能力タイプ 魔法干涉

武器 弓

趣味 食事、料理、人の世話

好きなモノ 食べ物全般

嫌いなモノ 魔法が使えないと言っただけで蔑む者

キャラ紹介

食べる事が大好きな大食いの少女。しかし体系は痩せている方と言え、食べている姿を見た女性たちに羨ましがられている。模擬戦

闘で攻撃する時に、謝ってから攻撃する等少し変わった一面もある。

能力の紹介

能力名は亡飲亡喰。自らが振れた者、自らの攻撃が当たった者に激痛を与えながら魔力を奪っていく。弓を得意とし、リリナと後衛から援護を中心として戦っているが、能力を駆使して前衛で戦う事も普通にできる。

獄神じくしん
焰ほむら

種族 神人

歳 十六歳

身長 一七六センチ

体重 六八キロ

髪色 黒に一部赤のメッシュ

容姿 上の上

能力 見敵必殺（サーチ&デストロイ）

能力タイプ 物理干涉

武器 銃

趣味 銃の手入れ、新たな銃の調達

好きなモノ 銃火器全般、銃弾

嫌いなモノ いじめ

キャラ紹介

自他共に認めるかなりのガンヲタ。一人称は俺様で、かなり傲慢。しかしイケメンである。そのため、ドが付くMでガンヲタでも気にしないと云う女性からはかなり人気がある。

神人の為、魔法が使えないと云う所での差別は受けなかったが、かなり酷いいじめを受けていた。

能力の紹介

能力名は見敵必殺。自らが撃った銃弾が確実に当たると云う能力。避ける事は出来なくても防ぐ事が出来るので、絶対に一撃必殺と云う訳ではないが、自らが指定しない場合は確実に頭に当たるように設定されている。

Prologue (前書き)

どうも皆様十六夜です。この度は友達からの希望、応援により再びこのサイトに登録し、この小説を復活させる事にいたしました。

以前読んで、お気に入り登録をして下さった多くの皆様方には大変ご迷惑をおかけいたしました。

データを消してしまったので、最初から書き直す事になり更新が遅くなりますが、もしよろしければ暇なときなどに読んでいただければ幸いです。

Prologue

1

「はぁ…、今日から学校か……………嫌だなぁ…」

どうも皆さんこんにちは。僕の名前はカオル・L・A・シンフォニー。今日から、セルシニア魔法学園高等部に通う十六歳の少年さ。僕が学校に行くのを嫌がるのには理由がある。

一つ目が魔法学園だと言う事。僕は昔から極端に魔力量は高かった。と言うより無限に近かった。しかし僕は攻撃魔法が全くと言っていないほど使えない。だから周りからは落ちこぼれと言われていた。だからこそ、魔法学園に通う事を嫌がっているのだ。

そして二つ目、高等部は全寮制になると言う事。これは落ちこぼれと言われている僕にとっては物凄く辛い。一日中落ちこぼれと言われ続けるからだ。しかも高等部は義務教育となっており四年間通わなければならない。僕としてはストレスで胃に穴があきそうだ。

そして最後三つ目、これが一番つらい。僕が今から通うセルシニア魔法学園高等部は女子の人数が圧倒的に多い。全校生徒が約千三百人ほど、そのうち約千二百人が女子なのだ。苦手と言う訳ではないが僕が生まれて十六年、女子と話した回数なんて指で数えられる位しかない。つまり女子に耐性が無いと言う事だ。まあある程度は大丈夫だけど。しかしこれから女子にも馬鹿にされるとなるとかなり辛い。まあそのほかにももっと大きな理由は有るが。

「ハア……帰ろうかな」

ホントに行きたくない。でもウジウジ悩んでも仕方が無い。僕は
そう思い足を動かした。そして目の前にあつた校門に入つて行つた。

2

この物語の世界、リベルは科学と魔法の両方が発達した世界です。
主人公はその世界の中心部となるセルシニアと言う都市、正確には
学園都市に住んでいます。ちなみに魔法学園の高等部は世界に全部
で五つしかなく、このセルシニア魔法学園は小等部から大学部まで
あります。全てがエスカレーター制で勉強しなくても大学部まで卒業
ができます。そして高等部からは普通科と工学科と理学科と農業科、
そして魔法学科とこの五つに分かれます。

そしてこの世界の特徴として、男より女の方が魔力が極端に多い
と言う事。つまり魔法学科に進むのは女子中心と言う訳です。何故
そんな中主人公が魔法学科に行かされたかと言うと、元々普通科に
通いたかつた彼ですが、その魔力量等から魔法学科に無理やり入れ
られたようなものです。ちなみに小等部では通常の授業しかありま
せんが中等部からは攻撃魔法の授業も入ってきます。これは男子も
受けなければなりません。だから主人公は落ちこぼれと言われている
のです。

次に魔法についてです。

魔法は主に、攻撃魔法、防御魔法、回復魔法、召喚魔法、捕縛魔
法、補助魔法の六つに分けられます。

攻撃魔法は、障壁破壊前衛型、拡散重視中衛型、大魔法用後衛型の三つと全てに適応した完全型の四つに分けられます。

障壁破壊前衛型は名の通り相手の防御障壁を破壊する型です。一撃の攻撃力が高く魔法詠唱も短い分隙が出やすいタイプです。

二つ目の拡散重視型は、一発一発が弱い分一回にかなりの数の魔法を放つタイプです。魔法詠唱も短く、強くなれば魔法の数が増え攻撃力が上がる分中衛型を選ぶ人が多いです。

三つ目の大型魔法用後衛型は、一撃で戦いを終わらせれるような大きな魔法を撃つタイプです。詠唱が長く、魔力も多量に使う分、最強の一撃を生み出せるタイプです。

そして完全型、これは上記の全てのタイプが使い更に、創造の力を持った者のみで使用できるタイプです。

防御魔法は、魔法防御型、物理防御型、結界指定型、絶対拒絶型の四つに分けられます。

魔法防御型は名の通り魔法を防ぐ防御魔法に特化したタイプです。そして物理攻撃に対する防御魔法を張れるのが物理防御型です。大体の防御魔法を覚える人はこの二つを両方覚えます。

そして結界指定型、これは使える人は少ない難しいタイプです。これは自分が範囲や対象物を指定して魔法と物理の両方を防ぐ結界を張るタイプです。しかしうまく使えば相手の使う魔法に制限を掛ける結界を張ったりする事も出来ます。

そして最後、絶対拒絶型。これは現在の世界では使える人はいないと言われる位難しいタイプです。相手の攻撃全てを拒絶する絶対領域を常時張り出し全ての攻撃に耐える事が出来ます。

回復魔法は、魔力回復型、回復特化型、蘇生型の三つに分けられます。

魔力回復型は自分の魔力を対象者の魔力に変換して回復させるタイプです。少し変わっており余り使おうとする人が少ないタイプで

す。

次に回復特化型、これは魔力以外を回復する普通のタイプです。味方の状態異常や怪我の治療、病気の治療などのタイプです。

最後に蘇生型。これは絶対拒絶型と同じで現在使える人はいないタイプです。このタイプは上記二つともできさらに、寿命を全うしていない死者を蘇らせることのできるタイプです。これを持つ者は時空の力を持っています。

召喚魔法はモンスターや精霊を召喚して戦う変わったタイプです。術者は召喚獣に魔力を供給し召喚獣は魔力に依じて強さを変えて行きます。術者は召喚獣を召喚したら魔力を供給する以外は特にすることは有りません。しかし、モンスターや精霊とあらかじめ契約しておく必要があります、攻撃や防御、回復魔法に比べたら使う人は少ないタイプです。

捕縛魔法は相手を捕まえるためだけの魔法です。そのため使う人は極端に少なく、大概使える人は警備や警察などになります。

最後に補助魔法。これはモノを浮かせたり、それを動かしたりなどする簡単な物です。小学校の最後らへんで口頭だけで習う簡単な物です。

次に魔法の属性に付いてです。

魔法の属性は一般的に炎、水、風、雷、土の五つです。これは基本となる属性で、扱える人も多いです。次に光、闇、血の三つが来ます。光と闇は魔力を消費して使う魔法ですが血は血液を使い魔法を放つ独特な属性です。これら三つの属性は特殊属性と呼ばれ、基本属性と違い使える人も少なくなります。そして次に創造、拒絶、時空の三つが来ます。これは本当にまれで使える人は殆んどいません。しかし拒絶以外は攻撃に特化しておらずあくまで最強の補助の

様なものです。これら三つは完全と呼ばれます。

次は存在する生物についてです。まずは人間。魔法を使える種族の一つです。

次に獣人。これは獣と人間のハーフです。基本的には人間と同じなのですが、獣化と言われる魔法が使え、自らを獣の姿に変え身体能力を上げると言う魔法です。その他にも、基本的身体能力が高かったり等もあります。しかし、魔法は若干人間に劣ります。

次に神人。これは魔法ではなく、科学と言う力を武器にした人類です。場合によっては魔法よりも厄介な力を持っています。これは人間と結託をして世界を作っています。

次に魔人。これは魔獣、天使、悪魔と呼ばれるモノを体内に封印している人類です。魔法の力は人間と同等かそれ以上、身体能力は獣人と同等かそれ以上と言われています。魔神化と呼ばれる魔法を使い、自らを魔獣、天使、悪魔の姿に変える事も可能です。これも人間と結託して世界を作っています。

そして最後に魔族です。魔族と言っても種類は多く存在し、先程紹介した魔獣もその一つです。代表的なのはドラゴンや吸血鬼等が居ます。この魔族の世界は、上記で紹介した種族の世界と別れ、リベルの四割が魔族の世界です。普通は人間界と魔族界と言う感じで別れています。ちなみに人間界の面積がリベルの約五割、魔族界が約四割で、残りの一割が禁足界と呼ばれる未開の地となっています。

P r o l o g u e (後書き)

前回の作品より、少し設定が多くなっています。

覚醒せし力（前書き）

今日の更新はここまでです。

覚醒せし力

「えー諸君、入学おめでとう。面倒くさいからこれで入学式を終わりにします！」

この場にいた全員がこける。おいおい、そんなあいさつで大丈夫か校長？ 何でそんなに挨拶を簡単にしたんだよ！ いや、これ挨拶って言うのか？

僕はそう思うが、本当に入学式が終わった様でクラス分けのある闘技場の場所を説明している。僕はこんな入学式で本当に良いのかと思いながら闘技場に向かった。

男子が少ないから視線がすごい。体制のない僕にとっては地獄？ ではない。僕はソソクサと闘技場に向かう。ちなみに、友達がいないから僕は一人で闘技場に向かっている。おい誰だ？ 悲しい奴って思った奴は。

そんな事を思いながら一人歩く僕。

「はあ…、どうせFクラスの最下位だろうな」

僕は少し皮肉った感じでそう言った。クラスは上から順にS>A>B>C>D>E>Fとなっている。僕は魔法が使えないから絶対にFだろうな。

「ハア、嫌だな」

僕はそんな事を呟き闘技場に入った。するとそこには僕よりも早く二人の女の子がいた。僕は二人に話しかけることなく教師の元へ向かった。

「おや、早かったね。普通なら友達と一緒に来るんだけど……
・その様子じゃ友達はいないのかい」

笑いながら冗談で言っているつもり先生。しかし、これが冗談
じゃないからグサリと来る。

僕は若干申し訳なさそうに声を上げる。

「あ、あの〜先生」

僕は顔をそらしながら先生を呼ぶ。

「ん？ どうしたんだ？ 友達がいらない少年」

僕のハートにグングニル（槍）！ 冗談になってないですよ先生。
僕は俯きながら一言言った。

「あのですね……僕、本当に友達いないんですよ……」

僕の一言で空気が凍りつく。先生は動きすら止めた。ウワァ…、
やっぱ言わない方が良かったかも…。

先生は銜えていた煙草を落とした。そして、焦ったように口を開
く。

「あ……その何だ………すまなかったな……ハハハ（焦）」

焦っているのばれですって先生。（焦）って口で言っちゃっ
てたし。

「まあそんな事より、始めませんか先生？ 他にも新入生はいっぱ
いますし」

「え、ああそうだな！　そうだそうしよう！　早く済ませる事は悪い事じゃないからな！」

相当焦ってるなこの人。自分が此処で新入生のクラス分けを行うって目的を忘れていたみたいだし。

「では、よろしく願います」

僕はそう言って頭を下げた。そして、構えを取る。

「じゃあ、始めようか」

そう言っ先生は攻撃をしてきた。僕はそれを必死に避ける、避ける、避ける。とにかく避け続けた。途中危うい部分もあったがとにかく避け続けた。

ちなみに、何故こんなにも避ける事が出来るのかと言うと、魔法が使えなかった事からいじめを受けたからだ。皮肉な事にその時、攻撃を避けたり防いだりしている内に上手くなったのだ。

「どうした？　避けてばかりじゃ意味がないぞ？」

先生はそう言っ挑発してくる。ええ、攻撃はしたいよしたいですよ！　しかし、接近戦だと実力差がわかり切っているし、かと言って遠距離だと魔法は使えないからどうしようもない。

とりあえず僕は、先生の挑発を挑発で返す。

「そう言っ先生も、さっきから一発も僕に攻撃出来てない様ですが」

ニヤリと笑いながら先生にそう言っ。まあ、年上だしこの程度で

怒るなんて事は――

「――んだとグルァ！」

あつたみたいだ……。と言うよりヤバイよ！ 先生怒って魔法使う気だよ。しかも最上級レベルの奴！ 僕死ぬって。

僕は先生が出し始めた魔力を感じて冷や汗をかいた。

「全ては燃える、その火焰に

我は炎の霸王と契約せし者、さあ霸王よ、今こそ我にその力を！
大地は燃え去り、天は焦がれ、万物は全て死に絶えるだろう！
炎属性上級魔法<燃え盛る世界>」

先生の詠唱が終わり魔法が発動すると、辺りは炎に包まれる。

「……ちょ、冗談になりませんでこれ！」

「ハッハッハッハッハ、終わりだ！」

先生は僕の声が聞こえていないのか、笑いながら魔法を放つてきた。

あ、コレ死んだ……。そう思った瞬間、火山が爆発した様な音が響いた。

「熱い、熱い、熱い、熱い！ って熱くない！？」

どう言う事だ？ 僕を中心にメートル位に火がないぞ。何が起こったんだ？

そんな事を思いながら、僕は炎の中から出た。

「ハッハッハッハ、終わりだ！」

俺はそう言っただけで新入生相手に上級魔法を使った。使ってしまった。ヤベエ！これ絶対にあいつ重症だって！どうしよう………ばれたら絶対にクビだよな。しかも教員免許剥奪で………マジでヤベエ……。

俺はノリでこんなことをやってしまった事を非常に後悔した。魔法を使っただけで思い出したのだ、相手が新入生だって事を。

「おいおいおいおい、死んじまってないだろうなこれ？」

正直さっきの友達の話よりも焦っている。さっきもやらかしたと思っただけ、またやらかしたよ。さっきは笑って誤魔化せたが、今回は誤魔化せんぞ。

俺がそんな事を思っていると、火の中から薄らと影が見えた。

「まだ生きている！よかった……」

少し安堵の息を漏らす。ああ、死んでなくて良かった。そう思っていると奴が火の中から出てくる。

「！？ 無傷だと……」

と言うより、服に汚れすらないだと！どう言っ事だ……。俺はそんな事を思いながら再び構えた。

「くはッ！ まだ構えているし」

火から出た僕の目に、一番最初に移った人が魔法を撃った張本人で、しかもまだ戦闘態勢だなんて……鬱だ。

「……成程、無傷だからまさかとは思ったが、君は結界指定型の防御魔法の使い手だったのか」

え、そうなのか？ 僕自身、初めてできた魔法だから何が何だか分からない。

「しかし、今魔法を防いでいる状態じゃ物理まで頭が回らないだろう！」

そう言つと先生は再び攻撃を開始してきた。

「結界を破る事は難しいが、出来ない事も無い！」

すると先生は先生は、手に魔力を集中させた。

「障壁破壊用攻撃術だよ。覚えておくんだ！」

そう言いながら攻撃してきた。しかし――

――パキン――

――高い音が響く。先生の腕は弾かれ、反動で腕が折れている。

「な！？ 結界じゃない！ ならそれは！」

先生は一人目を見開く。僕の事ですよね？ 何なんですか一体？

「絶対拒絶型か…………… 本当に存在していたんだな…」

「マジですか！？」

嘘だろツ！ 僕にそんな力があつたなんて……………でも、攻撃魔法が使いたかった…。だって男の子だから…。

「マジですかって、お前知らなかったのか…」

先生は呆れた顔で此方を見る。僕はそれに頷く。

「いやだって…、今まで魔法が使えませんでしたから…」

「そうか、まあ中学までは攻撃魔法をかじる程度だからな……………防御魔法はやらないから使えないと思っていただけだろ」

成程、よく考えれば確かに防御魔法はやった事がなかった。つまり、僕は防御魔法しか使えないと言う事だな。

「できれば、攻撃魔法も使いたかった…」

僕の呟きを聞き、先生が苦笑する。

「まあそう言うな。そうだ、お前にこれをやるつ」

そう言って先生は一冊の本を渡してきた。

「……なんですかこの汚い本」

嫌がらせか？ 嫌がらせなのか？ これを僕にどうしろって言うんだ？

「汚い本って……まあ否定はせんが。でもしかし、その本には遙か昔に使われていた武術が記してあるんだ。俺は習得できなかったが、お前なら出来そうだし」

「何か根拠でも？」

「まあな。その本を書いた奴が絶対拒絶型って言われているんだ。だからさ」

先生はそう言っで煙草に火を付ける。

「まあ、上級魔法を使っただお詫びと言う事でな」

その言葉に僕はそうですかと返し、本を頂く事にした。

「で、此処からが本題だ。君のクラスについてだ」

「あ、はい」

先生は煙草を吸いながら、僕の方を見た。

「君は、Sクラスに決定だ」

「…………ハア？」

「いや、だからSクラスに決定したって言ったんだよ」

ああ、成程……って――

「――ハアアアアア！?!?!」

いやいや、この僕がSクラス？ 何で何でだ何ですとの三段活用
!?

「五月蠅いぞ。それにSクラスで当たり前だろ。お前以外に絶対拒絶は見たことないし、しかも上級魔法を無傷で防ぐ事が出来るレベルだぞ。当然の結果だ」

「いや、ですが――」

「――あゝ、異論は認めん！ さっさと教室に向かうんだ！ 後がつつかえているだろう」

先生はそう言うつと僕を闘技場の外に投げ飛ばした。

「ウワアアアア……っと！」

空中三回転ひねり！ そしてみごとに着地！ 結果は腰を痛める
！ 最悪だ……。

腰を痛めたので擦りながら僕は教室に向かった。

教室に付きドアを開ける。するとそこには誰もいない。まあそうだろうな、僕が一番最初に模擬戦したみたいだし。

「ハア……寝ますか」

幸い、何処に座るかは決まっていなかった。僕は窓際の一番後ろの席に座り机に伏せた。

バコッ

「っ……誰ですか？」

僕は突然誰かに叩かれ起きた。すると横には僕がさっき戦った先生が居た。

「よっ、さっきぶりだな。随分気持ちよさそうに寝ていたから起こした。ほら、周りを見る。女の子の方が多いぞ、よかったな（笑）」

……何ニヤニヤしてやがる。

「おお、怖い怖い（笑）そう睨むな。ほら、自己紹介君が最後だ。とっととやれ」

「……なんか字が違う気がしますけど……まあ良いでしょう」

僕はそう呟き前に出た。改めて教室の中を見まわす。と言ってもこの教室に居る生徒は僕を合わせて五人、少ないな。男が一人に女が四人。まあ自己紹介をするか。

「えっと、僕の名前はカオル・L・A・シンフォニーだ。よろしー

「——自分の魔法のタイプとその中のタイプも言えよ。後使う武器も」

あのクソ教師め。わざわざ遮って言う事かよ。まあ良いか。

「えっと魔法自体のタイプは防御魔法。その中のタイプはええっと……絶対拒絶型だっけ？ 確かそうだったと思うよ。使う武器は……大体刃物全般かな？ 大体の物は使えるんだけど。でも、一番得意なのは野太刀だね。まあよろしく」

僕が自己紹介を終えると少しざわめいた。絶対拒絶型ってそんなに珍しいのかな？

パンパン

「はい静かにしろ。静かにしなかったら、もれなく罰を与えるぞ」

笑顔でそう言う先生。本気で怖い。先生がそう言うクラスは静かになった。

「よし、良い子だ。ええつと俺はこのSクラスを担当するシンヤ・クドウ・ラヴァインファンだ。まあこのクラスの担当となった。よろしく」

先生がそう言うと言いながら拍手があったので僕も拍手をする。

「さあて、君達にはこれから四年間、勉強を頑張ってもらいたいのだが……君達も知っていると思うが年に一回行われる最高のトーナメント、クラインド杯。これは毎年全学年が出場する。君達にはこれに向けて日々頑張ってもらいたい。それに出るためには年に二回行われ

る校内トーナメントをこの学年の中で優勝する事だ。そして校内トーナメントは約三ヶ月後にある。それまで頑張れよ。以上だ、帰っていいぞ」

先生はそう言う教室から出て行った。さてと、僕も帰るか。

かばんを持って教室から出た。正直、女子に耐性の無い僕にとっては辛い。入れは逃げるように教室を後にした。

誰かに話しかけられた気がしたが、僕はそのまま帰った。

出会い（前書き）

今日の朝から一五時くらいまで、復元ソフトを使って前回のデータを復元することに成功しました。

出会い

1

「良い天気……」

今日の天気は雲ひとつない晴れ。

「……最悪……」

日光が嫌いな僕はこう言った晴れの日は好きじゃない。しかし学校に行くためには日光に当たらなければいけない。

「………はあ…、行くとしますか」

溜め息をつきながら登校を始める。日の光で道路の所々がキラキラと光り眩しく感じる今日この頃。と言う事でどうも皆さんおはようございます、カオルです。

突然ですが、学校に行くのは嫌だと言う日はありませんか？ 恐らく、誰もが一回は思った事があるでしょう。今日の僕がそれです。と言うより、僕は毎日これです。

学校が面倒だ。行くのが嫌だ。だって、魔法が使えないんだもん！ これが昨日までの僕。しかし今日の場合は、学校に行くまで日光に当たるのが嫌だ。だって、眩しいもん！ これが今日の僕。魔法の一件に関しては、昨日僕が防御魔法を使えると言う事がわかったから良いとして、日光の問題はどうする事も出来ない。

太陽を破壊すればいいのか？　しかしそんな事は不可能だし、出来たとしてもやることはないだろう。

「熱い、眩しい、面倒くさい……」

ブツブツ文句を言いながら登校する僕。目標は皆勤賞。でも、さっそく妥協しそうだ。

そんな事を思いながら学校まである道をゆっくりと歩いていく。

「なあなあ、俺達と一緒にこねえかグハハハハ」

「そうだぜえ、良い事してやるぜえグヘヘヘ」

……朝からナンパか。何処かの誰かがナンパはこの国の文化だとか叫んでいたが、是非否定していただきたい。今まで文化を伝承してきた人たちに土下座をして。

「嫌だっていつてるでしょ！」

「私達学校があるんです……」

「良いじゃねえか」

そう言っつて男が一人の女子の腕を掴む。うわ、最悪ですね。ナンパもそうですが、無理やり連れて行くこととするなんて……この国も落ちましたね……。

「良いから来いよ……！」

「触らないで……！」

パチンッ

一人の女子が男を叩く。うわあ、絶対にあいっすらキレたよ。

「このクソアマ！ 黙ってついてくりや良いんだよ！！」
グイッ

「グヘヘ、お前もだよ！」

「キヤア！」

そう言つて男は二人の手を思いつきり引いた。男は魔法学科には少ない、しかし入ってくる奴等は大概強い力を持っているから彼女たちでは太刀打ちできないのだろう。

「はあ…、助けるか」

全く、最近の若いもんは…。

年寄りの様な事を思いながら、四人に近づく。

「止めなよ。朝から見つとも無い」

僕はそう言つて男の腕を掴む。ん？ この女子二人、よく見ればクラスにいた二人か。

「誰だデメエ！」

ウワツ、睨んできたし。やっぱ慣れない事をしない方が良かったかな？

「僕かい？ 僕はその二人のクラスメートさ」

「クラスメートだ？ お前この人が誰だか分かつてんのか！」

……該当する人物は記憶にない。なら誰なんだ？ 知らない奴の

事を使って脅されても、全く怖くない。

「ああ、お前田中か！ よお田中！」

とりあえず知っているふりをする。

「田中じゃねえよ！」

失敗……なら誰なんだ？

「このお方は中村さんだぞゴラァ！」

……選択ミスったみたいだな。いやあ、田中と中村で迷ったんだが、結局田中にしたんだよな。

「ああ、そうですか。で、その中島さんがどうしたんで？」

「中村だよ！」

まあ、こんな馬鹿な事をしている暇はないな。

「彼女たちを話したらどうだい佐藤さん」

「だから中村つつつてんだろ！ それに、この女が俺を叩いたんだ。正当防衛だね」

拉致は正当防衛に入らないと思うが……。まあ良いや。

「そつだぜグヘヘヘ」

「なっそれは貴方達が無理やり」

「そうです。アミは悪くないです!」

二人がそう言っただけで反論する。まあ、一部始終見ていたから分かっているのだが。

「そうか、なら仕方がないですね」

「ヒツヒツヒ、そうだけ仕方のない事なんだぜ」

男は笑いながら、女子二人は軽蔑する様な目を向ける。

「まあ、そう言う事だから部外者はどっかに行け!」

男はそう言っただけで僕を追い出そうとする。しかし、此処から僕が僕ターン!

「え? 何でどっか行かなきゃいけないんですか? いつ僕が見逃すって言いましたか? え、馬鹿なの? 死ぬの? 見逃す訳無いでしょ、このロリコン」

そこまで言うかと言う位言い続ける。年下をナンパし無理やり連れて行くとするやつは、ボクの基準では問答無用でロリコンなのだ。

僕がそのセリフを言うと、男はキレ殴りかかってくる。しかし――

「――グアアアアア!――!」

僕の絶対拒絶型の魔法障壁がそれを許さない。

「残念でした。フヒヒ、ワロスワロス」

殴りかかって来た男を見下しながら笑う。するともう一人の男が魔法を発動させる。

「テツテメエ！　＜土の槍＞！」

土で出来た槍が飛ばされる。しかし、僕の障壁の前では泥団子も同然。槍は障壁により全て防がれる。

「な！？　何をしやがった！」

「さあ？　何でしょうね？」

そう言って男に近づき、僕は男であればどんな人でも致命的ダメージを受けるある部分を蹴りあげた。

「~~~~ッ！？！？！？」

男は口で言い表せない痛みに悶える。それを見ていた回りの男子生徒達も、顔を青くし同じ部分を抑える。

「さてと、行くとするかね」

僕は学校に向かって再び歩き出す。

「待つて！」

「待つてください！」

「ん？」

僕はナンパされていた二人の女子生徒に呼びとめられる。

「あ、ありがとう」

「ありがとうございます。助かりました」

そう言ってお礼を言ってくる二人。うん、素直で良い子だな。

「いや、なに。朝から気分を害された腹いせみたいなものだから、気にしないで良いよ。じゃあ僕は先に行くから」

僕はそう言って走ってその場から去った。

2

「何でこうなった…」

「さあ？ お前の運命だろ」

僕は自分の置かれている状況を冷静に分析して、そう呟いた。一人の男子がそれを聞き、返事を返す。

「……………厨二病？」

「誰がだ！」

男子はそれを聞き、失礼だろこの野郎！　みたいな感じで言い返す。

「いや、君以外にいないだろ」

「五月蠅いわ!」

まあ、こんな漫才みたいな事は置いといて、何故僕の席が移動しているんだ?

「僕の席は窓際の一番後ろのハズなのに……」

ボソツと呟く。まあ、元に戻せば良いか。そんな事を思っていると、一人の女子が話しかけてくる。

「うちがゆるさへんねん。後ろに一人でおる事を」

独特な口調の女子がそう言う。ああ、彼女が机を移動したのか。まあ、どうでもいいや。

「なら、此処で良いや」

「うん、それが一番やで」

満足そうに頷く。さて、此処からが重要だ。僕は今までこの事実を目をそむけてきた。恐らく、前向きに向き合えば僕は気絶する可能性があるからだ。

「ななな、何できき君は僕の膝の上に座っているのかななな?」

女子に耐性のない僕が、膝の上に女子が座っている事実を見て平気な訳がない。声が震えているのが自分でもわかる。

「……此処が……気に入った……から？」

疑問形……いやいや、それで返されてもねえ……。

「僕に聞かれても……ねえ？」

目を若干そらしながらそう言う僕。そう言えば、さっきの二人もこのクラス何だよな。と言う事はこのクラスの女子レベル高すぎるだろ！

顔を真っ赤にしながら、そう思う僕。まあとりあえず――

「――退いてもらえる――」

「――ヤ」

即答ですか……。これはいろんな意味で不味いかも。僕の精神的な意味でも、肉体的な意味でも。

「カオル、顔が赤いで」

ニヤニヤしながらそう言われる。分かっていますよ！ 自分でも自分の顔が赤くなっている事くらい。

「仕方ないじゃないか……。今まで異性と喋った事なんて、殆どないんだから……」

僕は俯きながらそう言った。恐らく、顔はこれ以上ない位真っ赤だろう。

そんな僕をよそに、笑いだす三人。

「アッハッハッハッハ、お前面白いな」

「ホンマや、此処まで笑ったの久々やで」

「……クスッ」

「笑わないでくれないか？　と言うより、貴方が僕の上に座っているのが原因だよ。何笑っているんだい！」

此処まで馬鹿にされたのは久しぶり……でもないな。ついこないだまで、魔法が使えないって事で馬鹿にされてきたし…。

そんな僕の心の叫びは聞こえるはずもなく、笑い続ける三人。暫くすると教室のドアが開く。

「おはよう……って、何やってんのよあんだ達！」

「おはようございます……って、何やっているんですか二人とも！」

朝会った二人が驚いたようにそう言った。まあ、無理もない様な…。

「いや、何って言われても……」

「言われても…じゃないわよ！」

「そうですよ！　と言うよりレナちゃんもシンフォニー君から離れてください！」

「……ヤ！」

さっきより強く言って、更に抱きついて来る。ヤバイヤバイヤバイヤバイ！　もう限界が近い！　このままだと意識が飛ぶ！

此処からは、カオルの脳内会議の現場です。

「ダメです！ このままでは本体が持ちません！」

「諦めるな！ まだ何か、まだ何か手はある筈だ！」

「羞恥心が七〇パーセントを上回りました！ ダメです、レットゾーンに突入です！」

「不味い、このままでは暴走するぞ！」

「仕方ない、最終手段を使うしか……よし、気絶信号を送れ！」

「信号拒絶！ ダメです、我々からの捜査は不能です！」

「何だと！」

ハッ！？ 僕は一体何を……いかにいかに、軽く意識が飛んでいった。と言うより――

「――レナって名前だったんだ……」

僕の一言でクラスの空気が凍りつく。

「……………自分、知らなかったのか？」

まさかと言う感じで聞いて来る。僕はそれに頷く。

「まあ、自己紹介の時寝ていたし……」

僕の一言で皆がポカーンとした。そして呆れたような表情になる。

「そう言えばそうだったな……なら改めて、俺の名前はシン・ステファニーだ。障壁破壊前衛型だ。使う武器は大剣。よろしく。シンと呼んでくれ」

「はあ……、自己紹介寝てるって……どう言う神経してるんや。まあええわ。うちの名前はカナ・クロイツン。拡散重視中衛型と大型魔法用後衛型の両方やで。使う武器は杖、よろしく頼むでえ。呼ぶ時はカナでええで」

二人の自己紹介が終わる。すると下からつつかれる。

「レナ……レナ・Y・アストレイ。……召喚魔法。……武器……銃。よろ……。呼ぶ時は……レナ……」

「は、はい。よろしくお願いします」

若干緊張しながらそう言う。と言うより、いい加減退いてくれな
いかな？ それはさておき、僕達の視線は残った二人に向けられる。

「わっ私の番？ なら、私の名前はアリア・ファイリーよ。障壁破壊前衛型で、使う武器は槍よ。よろしくしてあげるわ！ 特別にアリアって呼ばせてあげるわ」

「最後は私ですね。私はミリア・スレリアです。魔力回復型と回復特化型で、使う武器は弓です。よろしくです。ミリアで構いません」

二人の自己紹介が終わる。僕はこの時思った。このクラスの女子
って本当にレベルが高いなと。

「……何だ？」

皆の視線がこちらに向いている。

「いや、お前だけ自己紹介していないだろ」

シンがそう言う。しかし、昨日聞いているのではと僕の中で疑問に思う。

「まあ、昨日聞いたけど一人だけしないってのはないだろ」

ああ、そう言う事か。なら、僕も自己紹介をするべきだな。

「えっと、僕の名前はカオル・L・A・シンフォニー。絶対拒絶型らしい。得意な武器は野太刀。使う武器は刃物全般。まあ、よろしく。後、呼ぶ時は何でも良いよ」

僕はそう言っで自己紹介を終える。何か変な所はなかったよな？僕の自己紹介が終わってから、少し皆がざわついているし……。そんな事を思っていると、カナが話しかけてくる。

「なあ、自分でホンマに絶対拒絶型なん？」

ああ、その事か。

「まあ、そうらしいよ」

「らしいって……自分の事じゃないんですか？」

ミリアが僕の回答に疑問を持つ。まあ、自分でも本当かどうかは分からないんだけどね。

「まあ自分の事なんだけど、絶対拒絶型って気付いたの……昨日のクラス分けの時なんだ……」

僕の一言で再び空気が凍りつく。そして――

「……ハアアアア!?!?」「……!?!」

四人が声を上げて驚き、一人が目を見開く。

「ちょっと、どう言う事よそれ!?!」

アリアが僕の方を掴み揺らす。

「ちょ、話すから、揺らさないで……」

僕の声が届いたのか、揺らすのを止める。もう少しで、最上級魔法くオートリバーズ（簡単に言えば吐く事）が発動する所だった。

「い、いや、中学の時魔法が使えない落ちこぼれが居たでしょ。それが僕なんだ。ほら、Aクラスにいた」

全員はそう言えばと言った感じの顔になった。

「成程、それがカオルだったと」

シンが頷きながらそう言う。僕はそれに頷き、その通りだと言う。

「え、今日模擬戦あるんですか？」

「そうよ。今日一日模擬戦よ。まあ、昨日あんた寝てたから分からないでしょうけど」

アリアがそう言って笑う。と言うより、一日模擬戦か……………嫌だな。

「ちょっと僕お腹の調子——」

「——なら闘技場に行こうか」

シンが僕の言葉を遮り、皆にそう言う。僕はとりあえず、目を背けてきた膝の上に座っているレナを降ろす。

「むう…………抱つこ……」

レナがそう言って僕に向けて手を広げる。何だこの生き物？ 滅茶苦茶可愛い。可愛すぎる！ でも、耐性がないから僕には無理だ。

「じゃあ、行こう！」

シンが元気よく闘技場に向かう。僕はシンに引きずられながら、闘技場に強制連行された。

VS教師（前書き）

前は登場人物紹介を入れたんですが、やっぱり入れない方がいいですね？

VS教師

1

シンに引きずられながら闘技場に着いた僕は、朝からの疲労感もあり模擬戦という気分じゃない。このままUターンして寮に帰りたいのだが…。

「お、お前達早いな」

僕達が闘技場に着いた後、少し遅れてからシンヤが入って来た。

「君は遅すぎるんじゃないかい？」

「……教師に向かって君はないだろ……まあ良いが」

良いのかい。ならこれからは適当に呼ぶ事にしよう。

「とりあえずだ、授業を始めるぞ」

シンヤの声で皆が静かになる。こう言う所を見ると、本当に先生なんだと思ってしまう。

「今日の授業は模擬戦だ。そして今から、俺とカオルの戦いをデモンストレーションと言う感じでやりたいのだがどうだろうか？」

シンヤはそう言って皆に尋ねる。僕とシンヤの戦いねえ……………つて、僕！？

「ちよつとま——」

『——賛成!』

皆が僕の声を遮り、一言言つた。つて、おい!

「じゃあ、そう言う事でカオル、舞台に上がれ」

そう言いながら僕を引きずるシンヤ。拒否権は無しなんですか!
誰か僕に自由を!

「Please me freedom!」

「何を言っているんだお前は?」

僕は舞台の上に立たされそう叫んだが、軽くスルーされた。僕、
泣いていいかな?

「ほら、始めるぞ」

シンヤはそう言うのと攻撃を開始した。つて、きたねえ!

僕がそう思った瞬間、シンヤの拳が目の前に合った。僕はそれを
間一髪のところで避ける。

「危な!? いきなりなんてセコイぞこの野郎!」

「ハッハッハ、お前なら問題ないだろうがッ!」

僕は再び飛んできたシンヤの拳を、障壁で防ぐ。

「クッ、やはり接近戦では不利か。その障壁が厄介すぎる」

シンヤは冷静に分析する。しかし、突然笑い出し攻撃を開始する。

「ハッハッハッハ！ 破れないのであれば、破れるまでたたき壊すのみ！」

そう言っつて障壁を殴り続けるシンヤ。

「マジですか！？ お前軽く本気だよな！」

どう言っ事だよ。障壁越しに衝撃波を感じるって！

「どうしたどうしたどうした！ この程度なのかお前は！」

この程度って、あんた教師だろうが！ 普通に考えて勝てる訳無いだろ！

「チッ、魔法障壁範囲拡大！」

僕は障壁に魔力を込め、その大きさ、そして範囲を拡大させシンヤを吹き飛ばす。

「さあ、僕のターンだ！」

僕はシンヤの砕いてくれた舞台の一部を上投げる。そしてそれを障壁でシンヤに弾き飛ばす。

「うお！？ そんな使い方も出来るのか！ ますます楽しくなってきたなオイ！」

ウワァ、何て良い笑顔……じゃないよ！ 僕の命の危機を感じるよ！

「お前なら使っても良いかもしれんな」

シンヤはそう言うと、上着を脱ぎ捨てる。そして魔力を解放する。

「……部分魔神化、対象右腕！」

シンヤの右腕に魔力が集中する。魔神化だと！？ マジで殺す気なのか僕を！

「……ふう、これが俺の力だよカオル。俺の種族は魔人。知っているよな勿論？」

「え、ええ、でも生徒に対して使う技じゃないだろ魔神化は……」

「いやいや、お前だから使えるんだろうが。ちなみに、俺の飼っている魔は酒呑童子だ」

酒呑童子だつて！？ ふざけんな！ 鬼のトップじゃないか！

無理無理無理！ 絶対死ぬって僕！

「喰らいな！」

人の形ではなくなった腕で、シンヤは僕の障壁を殴りつけた。硝子が割れたような音が何回も響く。

「！？ 全方位多重防御障壁か！」

「ええ、まさか此処まで破壊されるとは思わなかったけどね！」

十枚の障壁を展開して破壊された枚数は六枚。どんだけ規格外何だこの人は…。

「だけど、目的は達せられた！」

僕はそう言っただけでシンヤの顔を目掛け拳を振るう。

「その程度の拳ではッ!？」

シンヤは僕に殴り飛ばされ、舞台の端まで追いやられる。

「ガア……、な、何だ今の力は！」

シンヤは殴られた部分を押さえながら、驚愕の目をしている。さあ、ネタばらしだ。

「簡単な事だよ。僕が殴り飛ばすと同時に、障壁を一気に展開するんだ。シンヤが障壁を破壊した時に、僕の障壁は対人障壁としても有効なレベルの実態を持つ事がわかった」

「何故って……成程な、殴った時お前の障壁を足場にして上から殴りつけたせいだ」

その通りと僕は返す。他にもシンヤから貰った汚い本に書いてあったことの一部であったりもする。

「シンヤ、君がくれた本に書いてあったのさ。そして、あの本に書

いてあつた武術“八華獄”^{はっけい}はこれが出来る事を前提として作られていたみたいだしね。それに、これは刀を使った武術を基本としている。拳だけだと応用編だからもつと習得が難しい」

「……成程な、だから俺が使えなかったという訳か」

僕はそれに頷き、構えを取る。

「昨日一日で覚えた技ですよ。八華獄の初級の初級、しかもまだ未完成ですが……使えない事はないので、出し惜しみはしませんよ」

僕の一言に先生が構えを取る。

「……八獄等活・屎泥処！」

僕はシンヤに殴りかかる。シンヤはそれを避けようとするが、僕が寸での所で拳を止めた。

「？ 何がしたいんだ？」

寸止めされた事により、僕が何をしたいのか分からないシンヤ。しかし次の瞬間――

――ズガンッ――

――シンヤは吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「ツカハッ！」

シンヤは力なく倒れる。

「屎泥処。この技は障壁のみで攻撃をする技ですよ。流石に不完全

だから寸止めをしないと使えませんが、今回はそれが正解だったみたいです」

僕は倒れているシンヤに近づきながらそう言った。

2

「…………カオルの防御…………最強すぎるでしょ……」

アリアは若干放心状態でそう呟く。

「それに、まだカオルは本気を出していないしな」

「え！　そうなんですか！？　あれで本気じゃないって……」

シンの呟きにミリアが反応する。シンの糸がわかったのか、カナが説明を始める。

「カオルの得意武器は野太刀やろ。しかし今はそれをつこうてない。つまりこう言うこっちゃ。野太刀を使えば攻撃も出来る言うこっちゃ」

カナの説明に一層目を見開くミリア。まあ無理もないだろう。先生とほぼ互角に戦っている生徒を目の当たりにして、更にそれが本気でないと知ったら。

「しかし、こない恐ろしいもんやとはな。絶対拒絶型、そしてそれを持つ者に開花するっちゅう拒絶属性。ほんま、無茶苦茶や……」

四人は唖然とする。しかしレナ一人だけが目を輝かせて舞台を見ている。

「カオル……すごい…カッコいい！」

五人はそんな感じで闘技場を見た。見続けた。すると倒れていたシンヤが立ち上がり、一言何かを言った。

3

「俺がこの程度で倒れるとでも？」

シンヤはそう言って立ち上がる。そして魔力を解放した。

「！？ 学生相手に何をするつもりなんだい君は」

シンヤは僕の言葉を聞き、フツと笑って詠唱を始める。

「全ては消える 全ては散る

破壊の鎚が天より落ちる

さあさあ神よ 我に裁きの力を与えよ！

雷属性最上級魔法<裁きの強雷>」

君は僕を殺すきなのかいと言う僕の呟きは、雷の音によってかき消される。

空を見上げる。するとそこには紫色に光る雷が走る。これは不味い、下手をすれば死んでしまう。僕は死なないために、両手を空に

かざす。そして――

「――対魔法多重障壁展開！」

拒絶の力を全開にした障壁を展開する。そして展開し終わると同時に闘技場に爆発音が轟く。たった一撃、僕の居た場所に巨大な紫電が落ちた。煙で僕の姿は確認できないみたいだが、舞台は紫電が落ちた衝撃で粉々に砕けている。

「はあ…はあ…、本気を出したんだ。少しは聞いてくれよ…」

シンヤがそう呟く。徐々に煙が晴れていく。残念だったねシンヤ。君の攻撃は完全に防がせてもらったよ。僕はそう思いながらドヤ顔でシンヤが居る方を見る。そして煙が晴れる。

「！？ 無傷だと！ ……チートを使ったのかお前は…」

シンヤは半分諦めたような感じでそう言う。

「もう良い、降参する。ダメだ、今のが喰らわないんじゃないかな。このバグキアラめ」

少しふざけんなと言う感じでシンヤはそう言う。

「ふふふ、生徒に負けて情けないですねえ」

笑いながら僕はシンヤにそう言う。シンヤはウゼエと言った感じで睨みつけてくる。

「五月蠅い！ ほら、とつとそこを退け！ 今から模擬戦を始め

るからな」

そう言っ てシンヤは舞台から皆の方を見た。

「今から模擬戦を開始する！ 対戦相手は俺の独断と偏見で決めさせてもらった！ 文句がある奴は良いに來い！ 赤点にしてやるからな！」

職権乱用じゃないかそれ？ 僕はそう思いながらシンヤの方を見る。するとシンヤはこつちを見てニヤリと笑う。

何だろっ、嫌な予感がする。僕の第六感がそう告げている。何かやらかすつもりだなこいつめ…。

「対戦相手はステファニー、クロイツン、アストレイ、ファイリー、ステリアVSシンフォニーだ！」

…………… ああ成程、僕一人対皆ね。成程、そんな事か。って――

「――そんな事じゃねえよ！ 五対一ふざけんなああああー！」

僕の叫びが闘技場に響いた。

模擬戦（前書き）

今回は発見した前回のデータを殆どそのままで投稿しました。

模擬戦

1

「ふざけんなああああ!!」

ハア!? 何この人、頭がおかしいのかい? 今の僕には理解できない。と言うより理解したくない! 五対一、絶対に無理だね。

「五月蠅いぞ、カオル。早く構えろ」

「いやいや、ちょっと待て。何で僕が一人なんだい?」

普通に考えておかしい。何を考えているのか…。

「いや、ただ単にお前が強いから」

「……何で君は教師をやっているんだい? と言うより、よく教員免許を取れたね。世も末ってやつかな」

僕はため息をつきながらシンヤにそう言う。

「おいっ、どう言う意味だ!」

「そのままの意味だよ。全く、君の様な人間が教師になるなんて……」

僕は哀しい者を見る目で彼を見る。

「おいコラ、なんちゅう目で俺を見てるんだ。仮にも教師だぞ」

「はいはい、わかりましたよ。教師（仮）さん」

「（仮）はいらん！」

彼が何か言っているようだが、あえて無視させてもらった。そして五人と向きあう。

「カオル、例えお前が一人だろうが全力で行くからな」

「せやで、手はぬかへんで」

シンとカナはやる気が十分なようだ。

「カオル…気絶させて………クスッ」

…レナが怖い。何だろう、本能的に気絶したら不味いと言っている。

「全力で叩き潰すわ。容赦しないんだから！」

アリア、容赦はしてくれた方がうれしいな……。

「カオル君に勝つ……カオル君が気絶…監禁…調教……私の物……フッフ」

ミリアはレナよりもヤバい気がする。負けられないなこれは……、

と言うより負けたら絶対にヤバイね、うん、絶対に勝とう。

僕はそう思い、闘技場の隅に置いてある野太刀を持った。刃は潰されている。恐らく模擬戦用の野太刀だろう。シン達も、自分の得意な武器を手に持つ。全部、刃が潰されている。レナの銃はゴム弾になっている。相手も本気だろう、だから僕も本気で行こう。

「よし全員武器を取ったな。なら始めるぞ……………始め！」

先生の合図で五人が一斉に動き出す。

「喰らえ！」

シンの大剣が僕の障壁にぶつかる。辺りにキーンと言う、高い音が響く。しかしシンは止まらず物凄い連撃をしてくる。

「うりゃあああああー！！！」

音が何回も響く。シンの連撃で身動きが取れない。その隙をついて、レナが詠唱を始める。

「地獄に住し…炎の霸王……………今こそ…力を貸して！」

契約召霊<イフリート>」

ズガンッ

レナの前に炎の塊が落ち、爆発した。そしてその中から、真っ赤なドラゴンが現れた。

「イフリート……………彼に…攻撃」

レナの一言でドラゴン……………イフリートは頷き、僕に突っ込んできた。

鼓膜が破れるかと思う位大きな音を出し爆発を起こした。僕はそれを障壁で防ぐ。

「イフリート………ボルカニックブレイズ…発動」

レナの言葉でイフリートは口の中に炎を溜める。そして――

――ドガン――

――イフリートの一撃は僕の障壁に直撃し、大爆発を起こした。

「まだや、追撃やで！」

土属性上級魔法<ロックブレイク>」

カナは詠唱を終えた魔法を唱え、僕に攻撃した。地面が砕け、僕の足元から巨大な岩が出てきた。僕は間一髪のところで避ける。すると岩は砕け散った。

「今やアリア！」

「わかってる！」

炎属性中級魔法<ミニ・エクスプロージョン>」

アリアが魔法を唱える。

「……まさか!？」

「気付いたか、しかし遅すぎやで!!」

カナがそう言った。二人は粉塵爆発を狙ったのだ。咄嗟に僕は障壁を張り出したが少し遅かった。

再び大きな爆発音が闘技場にこだまする。

「クッ…きついね」

僕は結構大きなダメージを受けたようだ。障壁は展開出来たものの、爆風により吹き飛ばされてきた物を一部弾けなかった。

「…今ので終わらないなんて……凄いわね」

「褒め言葉として受け取っておくよ。じゃあ、僕も攻撃と行こうか」

僕は構えを取る。するとミリアが――

「皆さん、気を付けてくださいです！ あれが来ます――！」

野太刀を持ったからといって構えは一緒、ミリアは僕の構えを見て技を察知する。ミリアの一言で全員が自分の構えを取る。しかし、普段から基本的に魔法でしか戦ってきていないから、構えには少し隙があり簡単に崩せる。だから僕は――

「――さあ、いくよ！ 八獄等活・屎泥処！」

今度は野太刀で皆の中心を薙ぐ。そこに拒絶の障壁が展開され、皆が吹き飛ばされる。

「あまかったね！ 僕は魔法が使えないと思っていた分、武術だけは鍛えていたんでね！」

僕は吹き飛ばされた皆に追撃を掛ける。どんなに弱い力でも、絶の力が付けばその倍以上の効果が期待できる。さらに、対物理障壁を展開しようが障壁自身は魔法に部類されるので意味がない。

「さて……終わりだよ――！」

僕は最後の攻撃だと言わんばかりに、五人に技を放った。

五人はもう攻撃を防ぎきる力は無かった。レナはかるうじてイフリートを出しているが、限界に近いのは目に見えていた。

「カオル…強すぎ」

「ハハ…まあこれが僕の力だよ」

僕はそう言っていると、再び野太刀を薙いだ。五人は吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。もうこれ以上やる必要はないだろう。

「はあ、終わりましたよ先生」

僕はそう言い、先生の方を見る。すると彼はニヤニヤしていた。

「なんだいその目は」

「いや、まだ終わってないからな」

「どう言う事だ……まさか!？」

僕はそう思い後ろを振り返る、するとそこにはギリギリと言う感じで立っているシンの姿があつた。

「はあ…はあ…はあ……、滅茶苦茶じゃないかお前の攻撃は」

「貴方以外は全員気絶、正直そのまま倒れている方がよかったのでは?」

僕はシンにそう言う。既に満身創痍のシン。立っているのがやつ

とだろう。

「フツ、彼女を前にして倒れてその場をやり過ごすなんてできないな」

「成程、その考えは好きだよ。でも」

僕は野太刀を構えた。

「じゃあその敬意を表して…一瞬で終わらせるよ」

僕は拒絶の力を野太刀に纏わせ、本気で野太刀を振るった。

ドゴツ

野太刀はシンの腹に当たった。多少障壁を張ったようだが、拒絶の力によりほぼ無効化され野太刀が直撃した。そしてシンは力なく倒れた。

「はあ、何か無駄に疲れたよ」

「そうか、今日の授業はこれだけだから帰っていいぞ」

僕はそう言われたので闘技場を出て行った。

「……拒絶の力が、創造や時空よりもはるかに強い…全く、昨日覚醒したのにもう殆ど使いこなすなんて……どんな練習をしてんだあいつは」

先生がそう呟いた。しかし、その呟きは僕に聞こえる事は無かった。

次の日

僕は昨日模擬戦で勝った事、そして一人で帰った事を猛烈に後悔した。

「フッフ、カオル君、貴方があんなに強いなんて感激です。でも、昨日一人で帰った事は感心できません。だから……お仕置が必要ですね……フフ……フッフ」

「カオル……凄過ぎ……レナじゃ……勝てない……でも……守ってもらうのも……良いかも……後レナも……一人で帰った事は……許さない……だから……お仕置き」

何なんだ、ミリアもレナも……二人は僕の腕に抱きついて離れない。そのせいで顔を真っ赤にする僕。

「ちょっとカオル！ 二人から離れなさいよ！！」

「……アリア、僕が抱きついてるように見える？」

僕はアリアに何言ってるの的な感じでそう言った。しかしアリアは……。

「あんたが其処に居るのが悪いんでしょうが！！」

んな滅茶苦茶な……理不尽すぎるよ。僕だって、気絶するかしな
いかの瀬戸際にいるのに……。

僕がそんな事を思っていると、僕の腕に抱きついている二人が突然立ち上がり、僕を引っ張り出した。

「ちょっとお二人さん…何処に行くんだい？」

僕が二人に聞く。しかし二人は笑うだけ、行く先は教えてくれなかった。

「あの、何をする気な——」

「——大丈夫カオル君、貴方は何もしなくて良いです——」

「——えっ？」

「そう…カオルは…動かなくて良い……」

何が言いたいんだ…？

「安心して下さい。ただ、気持ちのいい事をするだけですから」

「え……」

「痛いのは……レナ達……だけ」

うん、何となくわかってきた。

「ちょっとお二人さん………そう言う事はだ——」

「——何か？——」

「——ナンデモナイデス」

二人の顔を見た瞬間僕は、言葉を訂正してしまった。だって、後ろに阿修羅が居るんだよ。断れるそんな状況で？絶対に無理だって。

だから誰か…助けてくれ！！
僕がそう思う。

「ちよつと二人とも何言つてんのよ！」

アリア……君、最高だよ。

僕はアリアの一言に凄く感謝した。しかし、次の瞬間その感謝の心は崩れ去った。

「するなら私も一緒よ！」

ハア！？

「いやいやいや、そこは止めるべきだと思うよ!」

僕がそう言っと、アリアは僕の方を見てこう言った。

「初めてだから、優しくしなさいよ」

と一言。終わつた……僕の魔法使いになると言う夢が……あれ、僕もう魔法使いだね？何で三十歳で魔法使いなんだ？

まあ、それは置いて――

「——シン、カナ、助けて！」

僕が二人に言う。ちよ、二人とも、なんだその笑顔は、そして無言で手を振るな。

僕がそう思うも、二人は助けてはくれなかった。

そんな、最後の希望が……もう誰でも良い。だから誰か――

「——助けてくれええええええええええ！！！」

その後、カオルの姿を見た者はいない。

「「「ウフフフフ……」」」

「イヤアアアアアアア！！」

休日（前書き）

久々の更新です。

休日

1

どうも皆さんこんばんは。家事が大好き、寝るのも大好き、甘い物も大好きな力オ儿です。さて、僕は明日からある五連休の計画を立てています。皆さんにその一端をお見せしましょう。

一日目

A M 六時起床

A M 六時半就寝

P M 六時起床

P M 七時朝食

P M 八時風呂

P M 九時武器の手入れ

P M 十时就寝

二日目

A M 六時起床

A M 六時半修業開始

A M 七時半朝食

A M 八時修行場へ行く

A M 十時到着

A M 十時半修業開始

P M 一二時半昼食

P M 二時修業再開

P M 七時夕食

P M 八時修業再開
P M 一時修業終了
P M 一時半風呂
A M 一二時半就寝

三日目・四日目

A M 六時起床
A M 六時半修業開始
A M 七時半朝食
A M 八時半修業再開
P M 一二時半昼食
P M 二時修業再開
P M 七時夕食
P M 八時修業再開
P M 一時修業終了
P M 一時半風呂
A M 一二時半就寝

五日目

A M 六時起床
A M 六時半寮に帰る
A M 八時半帰宅
A M 九时就寝
P M 六時起床
P M 七時朝食
P M 八時風呂
P M 九時武器の手入れ
P M 十时就寝

とこんな感じです。アバウトだが、大体はこの予定で行こうと思

っています。

さて、今日はその大切な一日目。そして今の時間は六時半。と言う訳でお休みなさい。僕はこれから寝る事にします。

部屋の電気を消し布団にもぐる。そしてその数秒後、僕は意識を闇に落とした。

2

インターフォンが鳴り響く。しかし僕は寝ているので気付かない。だが相手も諦めない様でインターフォンを連打する。流石に僕もこれには起きる。

「……誰だろう？ こんな朝早くに……」

時間はすでに一二時である。

「全く、初日から予定がくるってしまったよ」

此处で再びインターフォンが押される。忘れてた。

「はいはい、今出ますよ！」

僕はそう言いドアに向かう。

「はいはい誰ですか？ PC部品は頼んで……」

冗談を言いながらドアを開けたが、僕はそこでフリーズする。そしてゆっくりと、ドアを閉めた。

「待て、落ちつけ、C o o l になれC o o l に。そうだ、これは夢だ。夢に決まって——」

——ピンポーン
再び音が鳴り響く。

「さっきのは幻覚だ幻覚。そうだ、寝ぼけてたに違いない！」

僕は自分にそう言い聞かせて、再びドアを開ける。そして——

——ガチャン
再び閉める。

「……僕の見間違えでなければ、犬耳メイドがいた様な？ あれ？ あれは猫耳だったかな？ いや、そんな事は些細な問題だ。おかしいな？ 僕は家政婦を頼んだ覚えはないのだが……」

僕がそうブツブツつぶやいていると音が鳴る。二度目の正直、これで僕は幻覚を見ていたと証明されるだろう。

そう願いを込めながら、扉を開ける。

ガチャッ

「……………」

僕は再びドアを閉めようとした。しかし——

——ガッ

ドアの隙間に二挺拳銃を差し込まれる。

「O p e n s e s a m e (開 け ゴ マ) 」

ウオッ！？ それは流石にシャレにならない！ どの機関の吸血鬼ですか貴女は！

「カオル君、任務ご苦労！ さようなら……。 …………… じゃなかった。 …… カオル…………… 何で… 閉めたの？」

ネタを続けるな！　そして閉めたのは貴女の格好のせいだよ！
訪問者はレナ・Y・アストレイ。そして今の彼女の格好はミニスカメイドが猫耳と尻尾を装備した状態。そんなのがドアの前に居たら、僕は閉めてしまうに決まっているのに。

「何で閉めたの？　何で何で何で何で何で……」

目がイッてるよ。ヤンデレはミリアで十分です！　いや、と言うより僕は耐性がないんでそんなにくっつかれても……… って！

「何で銃を向けるんだ！　じゃなくて向けるんですか！」

何故か敬語で言いなおしてしまう。それもそうだろう。これは怖い。こんな恐怖は初めてだ。

「何で何で…… ハッ！？　レナは…何を…？」

我に戻ったのか銃をしまい此方を向くレナ。

「…………… で、…………… 何で扉…………… 閉めたの？」

「…………… 本気で言ってる？」

「…………… (コクッ)」

レナは頷き、どうしたの的な表情で此方を見る。

「ねえ、自分の格好わかってるのかい？」

「……（コクッ）」

ええ、わかっててやっているの…。

そう、レナの格好は犬耳、そしてミニスカートのメイド服という格好だ。

朝からとんでもない者をお見せいただきましたよホント……。さつきまで寝る気満々だった目が完全にさめてしまったよ。

「ねえ、何でそんな格好してるの？」

普通の質問。しかし今の僕にはそれしかできない。だって本当にキツイもん。女子に耐性のない男子にこんな格好をした女子が来る……本気で気絶しそう。

「カオルが…喜ぶと……思ったから？」

首をかしげてそう言うレナ。可愛いな…世間一般で言うオタクてきな人が言つと燃えだっけ？ そんな感じだったよな…あれ、この字であつていたっけ……まあ良いや。

「何で疑問形…まあ良いや。上がってくれと本来なら言いたいところだけど、そんな恰好していられると僕も落ち着かないんだよ」

僕がそう言う。するとレナは悲しそうな表情になった。

「じゃあ…カオルは……この格好で…勇気を出して…来たレナを…追いつ返すの？」

「うう……」

レナは上目づかいの涙目だ。これは辛い……ここで追い返すと僕は外道畜生の鬼畜野郎になってしまうかもしれない。だから――

「しかたないね。まあ、汚い所だけど、歓迎するよ。じゃあその前に僕が服を貸すから着替えてくれ」

僕がそう言う。するとレナは――

「大丈夫……着替え……ある」

そう言つて、扉の外から大きなかばんを取り出した。
あれ、どう言う事だ？

「なんだい、そのかばんは？」

すると彼女は――

「レナの……お泊り道具が……入ってる」

――とそう言った。

ん、おかしいぞ？　今お泊りって言わなかったか？

「ねえレナ、君は泊まる気なのかい？」

「……（コクッ）」

！？！？

「ええええええええ！？」

「五月蠅いよ……カオル」

「あつ、すまない」

あれっ、何で僕が謝っているんだ。いや、そんな事より――

「本気で止まる気なのかい？」

「……（コクッ）」

ええ、本気なんですか……。でも――

「ほら、寮母さんの許可も――」

「取った」

素早いご返答ありがとうございます！　と言っより、最初から止まる気だったのか！

「いや、仮にも僕は男だよ」

「だから？」

「だからって……ほら、もし一夜の過ちとかあったら……」

「カオルは……そんな事……するの？」

「する訳無いだろ……！」

「なら……問題ない」

うつ、不味い。このままでは本気で止まる気だこの子…。

「あつ、僕今から魔法の練習をしようと思っていたんだ。だから悪いけど今日はむ——」

「レナも…一緒に……練習…する」

「……………」

諦めよう。予定は狂うが、別に修業が嫌いなわけでもないしな。
僕はそう思いため息をついた。そして、レナに着替えてもらい何時も修行している場所へと向かった。

3

僕とレナは学校を出て暫く行つた森まで来ていた。

「……………此处？」

「いや、この森の奥だよ。少しきついけど頑張つて」

僕がそう言うとレナは頷き歩き出した。

暫く行くと森の奥の開けた場所にでた。そこが何時時もの修業場所。
今僕はレナと一緒にその場所に来ていた。

「……………凄い……」

レナが一言つぶやく。まあ無理もないだろう。木々の間からこも

れる光、それに照らし出され光る透き通った泉水の水、その光に照らし出される城を思わせる瓦礫と彫刻、崩れかけている壁の数々、どれをとっても芸術的だ。中でも、泉の中心部に立つ天使の彫刻がそれらの雰囲気を一層盛り上げてくれる。

「此処はね、僕のお気に入りの場所なんだよ」

「お気に入り？」

「うん、此処には約千年前まで大きな城があったらしいんだ。十歳のころたまたま見つけてね、それ以来僕の秘密の場所になっているんだ」

「でも…何で…見つかってないの？」

当然の疑問。千年前の建造物やその跡地は国に管理されることになる。たとえそれが個人の私有地であったとしても。だがしかし、此処は千年前の建造物の跡地なのに管理どころか手の一つも付けられていないようだ。

「此処に来る途中、洞窟があっただろ」

「……（コクッ）」

「あの洞窟はかなり入り組んでいて別名“地獄の入口”と言われているんだ」

「！？ あそこが…地獄の…入口」

地獄の入口とは、国が指定した特定危険区域の一つで、入れば二

度と出られないと言われている。国が禁足地として指定している程の危険区域である。

「そうだよ、此処は地獄の入口の正解ルートを選んだ者だけがたどり着くことのできる桃源郷、僕はそこにたどり着く事が出来たんだ」

「そう…なんだ」

レナはこの場所を見まわしてそう言った。

「さあ、あっちに訓練場があるから行こうか」

僕はレナの手を引き訓練場に向かった。その時、レナの顔が赤くなっていたのは多分見間違えだろう。

僕はレナの手を引き、大きく開けた場所に出る。

「じゃあ、始めるとしようか」

僕の言葉にレナは頷き、ボク達は修業を始めた。

4

あれから僕たちは五時間ほど修業を行った。

「ふう、疲れましたね」

「……（コクッ）」

僕もレナも、大量に汗をかきながら瓦礫に座る。辺りは薄暗くな
ってきている。もうすぐ夜になるのだらう。

ギョツとレナが抱きついて来る。

「レレレレナ!？」

レナが僕の腕にしがみつく、どうしたのだらう。よく見てみると、
少し震えている。

僕は別の意味で震えているけど。

「カオル…少し…怖い」

ああ、成程。レナは暗闇が苦手なのだろう。でも、この場所で一
番気に行っているのが夜。昼とは違う雰囲気を出してくれる。僕が
此処に修業に来る時は大概、野宿をする。その景色を拝むために。

「レナ、帰りたいかい？」

「……（コクツ）」

彼女は首を縦に振る。

「なら、送って行くよ」

僕はその場から立ち上がり、彼女の方を見た。

「カオルは……どう…するの？」

「僕かい？ 僕は君を送った後此処に戻ってくるつもりだよ」

僕はそう言った。すると彼女はその場に座った。

「ん、どうしたんだい？」

僕が尋ねる。すると彼女は上目づかいで私に残ると一言言った。

「…野宿だよ」

「それでも…カオルが…残るなら……レナも…残る」

うつ！？ 上目づかいでそんな事を言われたらかなりきつい。正直、気絶しそうなくらい。皆さん、お忘れかもしれないけど、僕は女子に耐性が其処まで無いのですよ。学園生活で少し慣れたとはいえかなりギリギリなんだよ。

まあ幸い、レナは部屋に來たとき持っていたカバンを持ってきていたので着替え等は困らない。

「…わかった。テントの準備をするから少し待っていて」

「……フルフル」

レナは首を横に振った。そして――

「レナも…手伝う」

「でも、力仕事は…」

「なら…料理…作る」

ああ、成程。それなら助かるよ。

「じゃあ、よろしく頼むよ。器具はこのかばんの中に入っている。材料は修業中に取りつて来た物を使用してくれ。動物等は血を抜いて切つてあるからそのまま使用していいよ」

「……コクツ。レナ……おいしいの……作る……頑張る」

「あつ……ああ、期待してるよ」

本当に可愛い。もう、気絶しそうなくらい。

僕がそんな事を思っていると、レナは調理に取り掛かっていた。僕も早くテントを立ててしまおう。

そして暫くしてテントを完成させた僕。

僕の目の前にはテントが一つ。本来なら二つ作りたかったのだが、テントを一つしか持ってきてなかったのも一つしか作れなかった。まあ、レナが使って僕が外で寝たらいいのでそこまでの問題ではない。それに僕は“あれの練習”もしたいし。

そんな事を思っていると、辺りに良い匂いが漂ってきた。おそらく料理が完成したのであろう。僕はそう思ってレナの近くに出していた机の方へ向かった。

案の定、料理は完成していた。レナは出来た料理を机に運んでいる途中だった。

「あ……今から……呼びに行こうと……思ってた」

「そうかい。すまないね、手伝えなくて」

僕はそう言つて頭を下げた。

「気にしなくて……良い」

「でも……」

「レナ…料理作るの…好きだし。…早く…食べよ」

レナはそう言って僕を椅子に座らせた。

「じゃあ…いただき…ます」

「ああ、頂きます」

僕は料理を食べ始めた。

「……どう？」

「うん、美味しいよ。レナは料理が上手なんだね」

僕がそう言うとレナはホッとして、料理を食べ始めた。

僕はレナと会話を交えながら食事を楽しんだ。

「ご馳走様でした」

「おそまつ…さま…でした」

物凄く美味しかった。レナの料理の腕は天下一品と言っても過言ではないような気がする。

その後僕はレナと一緒に食器を片づけた。

「レナ、簡易のシャワーを用意してあるから使ってきて良いよ」

僕はそう言っで、壁の裏を指した。

「……………良いの？」

「ああ、僕は後で構わないから」

そう言っで僕は後ろを向いた。

「一緒に…入る？」

え！？

「ななな何を言っでるんだ！？　そそそんなことする訳ないよ！！」

僕がそう言っで彼女はクスリと笑い冗談だよと言っでシャワーのある方へ歩いて行った。

「全く…なら僕も、あの練習をするか」

僕はそう呟き、歩き出した。

5

レナ side

「気持ち…よかった」

シャワーを浴び着替え外に出た。

「…………綺麗…」

レナが外に出ると辺りは真っ暗になっていた。でも泉の水が月明かりに反射し青白く光っている。幻想的これがあったている。

♪♪♪

ん？ 音が聞こえる。

レナは音の聞こえる方へ向かう。

「亡き…王女のための…パヴァーヌ」

そう今聞こえているのはその曲。ピアノで弾かれているので辺りの雰囲気を一層幻想的にしてくれる。

「…………カオル」

目の前で彼がピアノを弾いている。辺りの雰囲気と綺麗に重なり芸術と言える。

「おや、レナ。もうシャワーは良いのかい？」

彼が問う。レナは静かに頷く。

「…………ピアノ？」

「ん、ああこれかい。これはね、ずっと昔から此処にあるんだ。何か魔法が掛けられているみたいでね、壊れていなかったんだよ。まあ、少し調律が必要だったから僕が直してそのまま使っているんだ。酷い所は玄が切れていたしね」

彼が弾くのを止めそう言う。

「此処にはね、他にも多くの楽器が保存されていたんだ。全部魔法が掛けられていたから直せば問題なく使えたしね」

そう言って辺りを見まわす。

「……凄い」

光に照らし出され徐々に楽器が出てくる。

「月の光に照らされると現れる仕組みになっているんだ。凄いよね、僕も初めてみた時は感動したよ」

「……ラ・カンパネラ」

「え？」

「リク……エスト」

「……畏まりました、お嬢様」

彼はそう言つとピアノを弾き始めた。

S i d e o u t

まさかリクエストを受けるとは……しかも大練習曲のラ・カンパネラを弾くことになるなんて……。まあ弾けない事も無いのだけど。僕はそんな事を思いながらピアノを弾く

パチパチパチ

僕が弾き終わると同時にレナは拍手をしてくれた。嬉しいね、こんなふうに拍手をくれるなんて。

「ありがとう。じゃあ、明日も早いからもう寝ようか」

「……コクッ」

僕がそう言っているとレナが頷く。僕たちはテントの方へと向かった。

「じゃあレナがテントの中を使って」

「カオルは……どう……するの？」

「僕？　僕はハンモックでも使って外で寝るよ」

僕はそう言う。まあレナが居るので元からそのつもりだった。しかしこの考えは次のレナの一言で崩れ去った。

「それは……ダメ……一緒に……寝る」

「……はい？」

何を言い出すんだこの子は。このテントは一人はいればもう限界なんだぞ。どうやっても二人では入れない。

「レナ、このテントに二人は入れないぞ」

「大丈夫。…二人で……寝れる」

何を言ってるんだ、どうやっても無理だと思うが。

「レナが…カオルの上に……乗れば…良い」

「ああ、成程………って、えええええ！？」

いやいやいや、ダメでしょそれは。いや、例え良かったとしても僕が耐えきれない。

「五月蠅い…カオル」

「おっと、すまないね…何で僕が謝ってるんだ？そんな事より、流石にそれは不味いよ」

「……??」

レナはわからないと言う感じで首をかしげる。可愛い、可愛いのだがもう少し常識を持ってほしい。

「レナ、僕は男、君は女だ」

「……（コクッ）」

「良いかい。年頃の若い男女が同じ空間で寝ること自体余り良い事ではないのに君は抱きつこうとしているのだよ。それは取っても不味い事なんだ」

「……何で？」

ええ、此処まで言っただけなの…。

「ほら、一夜の過ちとかあるかもしれないだろ」

「カオルなら…別に良い。…と言うより…してほしい」

ちよ、頬を赤く染めてそんな事を言うな。不覚にも燃えてしまっただろ…あれ、萌えてしまったかな？まあそんな事はどうでも良い。グイッ

「え、ちよまつ！」

僕がそんな事を考えているとレナが僕を引っ張り出した。

「早く…行くよ」

どんどん引っ張られていく僕。何でだろう、レナの力が物凄く強い。

僕の抵抗は虚しくレナに引かれ僕は、テントの中に入ってしまった。そしてレナが僕の上に寝そべった。

「ちよつとレナ！？」

「……温かい」

「え…」

「スウ…スウ」

レナは一言つぶやくと、寝てしまった。さて、これからどうしよう。上にレナが載っているため迂闊に動けない。かといってこの状態で寝れるほど僕の神経は太くない。今にも心臓が破裂しそうだ。

「さて、どうするか……」

この後僕は一晩中寝る事が出来なかった。

7

次の日

「フワァ…、結局寝る事が出来なかった」

少し眠いが大丈夫だろう。さてと、レナを起こすか。

「レナ、朝だよ。起きて、レナ」

僕が彼女に語りかける。彼女が起きてくれなければ僕がテントから出られない。幸いレナはすぐ起きてくれた。

「……おはよ」

「ああ、お早うレナ。早速で悪いんだけど、僕の上から退いてくれるかな？」

「……（コクッ）」

彼女はすぐに退いてくれた。そして僕はテントの外へ出た。

「うん、丁度良い時間だね」

僕がそう呟く。レナは何が何だかわからない問う感じで首を傾げた。

「フフ、もう少し待って。もうすぐ凄いモノが見れるから」

僕がそう言う。レナはそう聞くと僕と同じ方を向いた。そして――

「!?!? ……凄い……」

「フフ。ね、スゴイだろ。僕も初めて見た時は言葉を失ったよ」

朝日が差し込み辺りを照らす。泉の水は白く光り輝く、辺り一面白い光に覆われる。

「これがね、“天使の見回り”の正体だよ」

「これが…天使の…見回り」

天使の見回り何年かに一度、地獄の入口の奥の方で物凄い光が天に向かって伸びる現象。

ちなみに、最後にこの場所以外で天使の見回りが確認されたのはおよそ七年前になる。

「この場所はさ、三つの顔を持っているんだ」

「三つの…顔？」

「そう、レナも見ただろ。この場所の昼と夜、そして今この瞬間、朝の景色を」

「……（コクッ）」

「うん、この場所はさ、朝は神秘的な表情を、昼は芸術的な表情を、そして夜は幻想的な表情を醸し出しているんだ」

僕がそう言う。しかしレナの耳には殆ど聞こえてないようだ。もう、この景色を見ることに集中している。なら僕も、この景色を堪能させてもらおうとしよう。

僕たち二人は、一緒にこの景色を楽しむことにした。

僕たちはあの景色を見た後、修業を再開した。そして四日はあっという間に過ぎ、最期の一日になり僕たちは学園に戻る。

「フフ、久しぶりに他の人と修業ができてうれしかったよ」

「レナも…嬉しかった。……あの場所も…見れたし」

「そうかい。今度は皆で行こうな」

「……（コクッ）」

レナは僕の言葉に頷いた。

「じゃあまた学園で」

「……またね」

彼女は一言言つと自分の部屋に帰つて行つた。

「ふう、疲れたな。まあ、こんなのも悪くは無いね」

僕はそう呟き、ベッドに倒れ込んでそのまま寝た。

ちなみに、次の日学校の話で、七年ぶりに天使の見回りが起きたと騒がれていた。まあその日一番近くで僕とレナはそれを見たのだけど。この事はレナとの秘密となった。

十二騎士団（前書き）

相変わらず文才はないですが、一応更新です。

十二騎士団

1

「……下らないと言うのが正しい様な気がしますか？」

「まあそう言わずに、カオル君。君には十二騎士団を見てきてほしいのだよ」

「何で僕がそんな事を」

僕はいま校長室に居る。何を血迷ったかこの爺は今度の休みに、十二騎士団を見て来いと言っている。何故そんな面倒な事を僕がしなければいけないのか。

ちなみに、十二騎士団とは国直属の軍隊の事で兵数は少ないが實力は異質と言えるレベルだ。

「君は将来的に十二騎士団の十二番隊騎士団アブソリュート・テリトリの絶対領域に入るかもしれない」

「……僕は世間一般で言うサラリーマンを目指しているのですが……」

「君はサラリーマンと言う器ではない。まあ兎にも角にも行きたまえ。と言うより行かなければ単位を与えんからな」

……職権乱用じゃないか…ハア…

「やれやれ、何でも面倒な事を…まあ良いでしょう。貴方が言ったようにその十二騎士団とやらを見てくださいよ」

2

僕は今、十二騎士団の見学に来ている。だが、今の僕にはそんな事よりも驚愕する事実が一つ。それは――

「何でここに居るんだ……シン、カナ…」

二人がいたんだよ。いや、本当にビックリした。二人の隠し事ってこの事だったんだろう。

「それはこっちのセリフだ、カオル」

「……もしかして、今日見学にくる人ってカオルなん？」

「ええ、まあ僕であつてと思うよ」

全く、一人で歩きたかったのに。

「いやあ、特例で見学にくるうちゅう奴がいるから何者かは気になつたけど……まさかカオルが来るとはなあ」

「ああ、俺もビックリだ。だがしかし、お前はその拒絶の力があるからいつかは来ると思っていたがな。まあこんなに早く来るとは夢

にも思わなかったが」

シンは苦笑しつつ答える。僕の方が苦笑したいのに。

「ハア…校長め…帰ったら部屋を潰してやる」

「ハハハ、程々にしとけよ」

…そんな気は毛頭ないが。

「まあ、善処しておくよ」

「善処つて…知つとる？善処つちゅうんは最初からやる気のない人が使う言葉なんやで」

「ああ、知っているよ。だって、最初から程々にする気なんてないしね、フッフ」

そんな感じで笑う。まあ一人じゃなくても良いかな。

「まあ、取り合えず案内してやるよ。ついて来いよ」

僕はシン達の後に続き歩き出した。

3

三十分後

「で、此処が三番隊騎士団の訓練場だ」

「へえ、此処が三番隊の……ん、あの子達は」

僕が見た方にはクラス決めの時、僕より先に居た女子二人がいた。

「ん、なんやカオル、気になるんか？」

「いや、そう言う訳じゃない。ただ、クラス決めの時に僕より早く闘技場に来てたから印象に残ってたんだ」

「ああ、成程な。まあカオルは女には困らなそうだし。うらやましい限りだ」

「シン…どういう——」

「シ〜ン〜…どう言う意味や〜今の言葉？」

「——カツ、カナ!？」

僕の後ろには物凄い黒いオーラを纏ったカナがいた。

「おっ落ちつけカナ。俺はお前が一番だ」

「うん、そないな事はわかってるちゅうねん。カオルの事がうらやましいちゅう事はどう言うこっちゃきいてんねん」

「どんどん魔力を杖に込めて行くかな。ウワァ、これが修羅場つてやつか。面白いな。」

「そんな事をしているとさっき話しに出てた二人がこっちに向かってきた。」

「またやってんのあんた達は？」

「ホント、懲りないね〜…シン君も」

二人は来るや否やそんな事を言い出した。
もしかして、いつもの事なのか？

「いやあな、シンが二人んことヤラシイ目で見よったから注意してんねん」

「なつ、断じてそんな事は無いぞ！」

「え〜、シン君エッチ〜」

「全く、彼女がいるのに何をやってるのシンは」

「ちょ、何でそんなふうになる！ カオル、お前から何とか言っ
てやってくれ」

おつ、半分空気になっていた僕に話しかけてくれた。嬉しいねえ。

「……でもシン、事実じゃないかい」

僕は前、見捨てられた事を根に持っていたので此処はあえてシンの敵に回った。

「なっカオル！？ お前裏切る気か！！」

「ん、裏切る？ 元々協力したつもりもないけど」

フフンッといった感じでシンを見る。隣では黒いオーラで毘沙門天

を作り上げて、目が光っているカナがいた。うわぁ、怖いねえ。

「カッカオル、助けてくれたら学園の売店に打ってある特製プリンを五個奢るから！」

学園の売店の特製プリン……一個五百リート（一リート＝一円）するプリン。しかしそのおいしさはまさに甘党の僕にとっては最高のスイーツ。是非とも食べたい。毎日一個で我慢しているがそれを五個も買ってくれる……だがしかし――

「……十個なら良いよ（笑）」

僕は笑顔でそう言った。

「クッ……足元見やがって！　なら、六個でどうだ？」

「十個！」

「……七個は？」

「十個！」

「マジ、八個で勘弁して下さい」

「……ハア、わかった。八個で妥協しよう」

むう、泣きながらそう言われると断れないじゃないか。

そんな事を思っていると、カナはシンに対し、魔法を放ってきた。

「うちがおるのに……ゆるさへんでええええ!!」

「ハア……」

僕はため息をつきながら手をかざす。辺りに硝子が割れたような高い音が響く。

案の定、僕の障壁に弾かれるカナの魔法。

「ハア……落ちついてカナ。二人も囃し立てない。カナ、考えても見なよ。幽霊を怖がるような胆の小さい男のシンが——」

「オイッ、どう言う事だ!!」

「——胆の小さいシンが——」

「無視か？無視なのか？」

「——胆の小さい少年Sが——」

「だからmゴヘッ……バタッ」

「——五月蠅いよシン。思わず足が出ちゃったじゃないか」

僕はそう言いだした足を引っこめる。

「テツテメエ……奢らねえ——」

「……（スッ）（手を構える音）」

「——嘘です。絶対に約束は守らせていただきます」

シンは少し震えながら答えた。

「ハア……全く、次ふざけた事をぬかしたら……潰シマスヨ」

「ヒイ!？」

僕はシンの股の間に足を構えながらそう言った。

「……何か怒る気失せたわ……」

「まあ、それが一番。所で、貴方……誰？」

え、今さらですか。まあ名乗るけど。

「僕ですか？　僕はカオル・L・A・シンフォニーです」

初対面と言う事で敬語は絶対。

「……君があん絶対拒絶型の……フウン、私は雪波^{ゆきなみ} 鈴^{れい}。よろしく。鈴で良いから。私もカオルって呼ばせてもらうよ。一応先輩だ」

「はい、よろしくお願いします」

雪波？　……もしかしてあの雪波 咲代の子孫か。成程、だから三番隊所属ね。

ちなみに雪波咲代とは、十二騎士団創設時の三番隊隊長だった人で、数々の伝説を残している。

「で、貴女は？」

僕は先輩と一緒に来た女の子を見た。

「ボク……？　ボクの名前は雪波^{ゆきなみ} 雫^{しずく}。よろしくカオル先輩。私の事は……雫で良いよお」

何か気の抜けた喋り方だな。と言うより同じ姓じゃないか……つまり――

「二人は姉妹なのかい？」

「ああ」「そだよ」

でも、大分印象が違うね。

「さてと、そろそろ僕は行くとするよ。もう見る所は見ってしまったしね」

「そうか…んならまたあ——」

「ちよつと待て」

「——した……」

言葉を遮られ、帰ろうとしたところを止められる。

「ん、何です？」

僕が後ろを振り返ると、木刀を構えた先輩が居た。

「私と手合わせして頂けないかな？」

「…ハア？」

「だから。手合わせしてって言っているんだ!!」

突然何を言い出すかと思えば——

「僕は帰りたいんですが……」

「駄目だ！ 先輩命令で私と手合わせをしろ!!」

「おい、其処の三人、何とかしてくれないかい？」

僕が三人にそう言う。するとカナが答える。

「あゝ、諦めカオル。ああなった鈴は止まらへんねん。まあうちらも気になるしなあ」

カナがそう言って二人を見る。

「まあな。創造の力と拒絶の力、どちらが上か知りたいし」

「ボクはただ、カオル先輩の実力が知りたいだけだし」

成程、誰も味方はいないと。諦めよ。

「はあ…、なら野太刀位の長さの木刀か何かないですか？ なければ普通の木刀で良いのですが…。流石に丸腰ではきついので」

僕がそう言うと先輩は了承してくれる。そして一本の長い木刀を僕に投げ渡してきた。

「さあ、これで準備は整っただろう！ 始めるぞ！」

先輩はそう言うと、コインを空に投げる。そして、コインが地面に当たり音が響く。

「先手必勝！ 神速抜刀・神威！！」

激しい闘気と殺気が僕に飛ばされ、拘束の刃が僕の首元に向かっ

てくる。僕は咄嗟に障壁を展開し、その刃を防ごうとした。しかし、障壁一枚では防ぎきれなかったようで、僕は更に三枚の障壁を展開。その内二枚を破られたが、何とか防ぎきった。

「……ッ!? 流石は三番隊・神風の隊員シェンフォンだけはある」

即席とは言え、三枚もの障壁をいとも簡単に破壊されるとは予想外だった。

「噂に名高い絶対領域なだけはある！ 即席で四枚もの障壁を展開するなんて！」

先輩は嬉しそうに木刀を鞘に納めるように構え、体制を低くする。

「しかし！ スピードについてこれなければ意味はない！ 神速抜刀・俊足滅敵!!」

先輩が僕の目の前から消える。いや走り出したと言っのが正しいだろう。しかし、速すぎて目視する事が出来ない。

「速さは力！」

「……ッ!? 流石は十二騎士団の隊員だけはある！」

僕は何とか反撃しようと狙いを定めるが、移動速度が速すぎて攻撃ができない。

「これで終わり!!」

やられる！僕はそう思った。しかし、その瞬間にオレンジの曼

茶羅型の障壁が展開される。

鐘を撞いた様な低く響くような音が辺りに鳴る。

「!？ 障壁を展開した!？ しかも、今の速さだと騎士団長レベル!？」

先輩は再び距離を取る。

僕はこんな障壁を無意識の内に展開したと言うのか!？

「……………フツ、絶対拒絶型を甘く見ないでくださいよ」

平常心を装い、この障壁を展開したのが自分の意思だと言う嘘をつく。これをすれば、恐らく迂闊には攻撃してこないだろう。

「さあ、今度は僕の番です!」

僕はそう言うと、足元に障壁を展開する。その反動で僕は急加速を行い、一瞬の内に先輩との間を詰める。

何故反動が起きたかと言うと、絶対拒絶型の障壁の効果にある。通常の障壁は、自らの体に限りなく近い場所で展開される。しかし絶対拒絶型はある程度の空間を置いて、障壁を展開するので、例えばそこに何があるとしても、それを押しのけて近くから一定の場所まで動くのだ。

その時の反動で僕は急加速を行ったのだ。そのため、僕がいた場所の地面は、障壁を展開した四角い跡がくつきりと残っている。

「八獄大叫喚・異々転処!」

僕は先輩の腹に蹴りを当てる。そしてそこから障壁を展開し、先輩を壁際まで吹き飛ばす。更に足元に障壁を展開し、僕は飛び上が

る。

「クツ、身動きが！」

身体を強打した反動で、身体が動かなくなる先輩。僕はその真上から回りながら落ちてくる。そして落ちた瞬間に先輩の頭の上で木刀を止める。

「僕のか…ッ!？」

「わ、私も一応十二騎士団の一人なんでな」

僕は勝ちを確信していた。しかし、僕が頭の上で木刀を止めたと同じくらいに、先輩も僕の首元に木刀を当てていた。

「……………引き分けて所ですか？」

僕がそう問うと、先輩は頷く。僕は木刀を引いて、先輩に手を差し伸べる。

「立てます？」

全身を強打しているので、一応聞いておく。

「ああ、問題ない。しかし、君は強いな」

「ハハハ、先輩に比べたら全然ですよ。僕は少し前まで魔法が使えない落ちこぼれでしたから」

「落ちこぼれ？ 君がか？」

まあ絶対拒絶型の魔法使いが落ちこぼれ何て言っていたらおかしいだろう。僕は先輩に今までの事を話す。すると、先輩は納得したように頷く。

「成程、魔法が使えないと思っていから武術の方だけは鍛えていたと」

「ええ。まあそうでもしないと抵抗はできませんしね」

実際、体を鍛えていなければ死んでもおかしくない様な事も何度かあった。

「では、僕は帰らせていただきます」

僕は先輩に一礼し、シン達の元に向かう。

「シン、約束を忘れないでくれ。じゃあ、また明日」

僕はそう言って闘技場を出る。こうして、十二騎士団見学と言う僕の一日は終わった。

武器召喚授業（前書き）

文才が無くてごめんなさい…

武器召喚授業

1

今日はAクラスと合同で武器召喚授業を行う事になったようだ。
だから僕は登校してすぐ闘技場に向かった。

「おつ、早かったな。お前が一番だぞ」

「……君のおかげで驚かされたけどね」

「ん、何でだ？」

本気で言っているのかこの人は……。

「あのねえ、何の連絡も受けていないのに学校に来たら黒板に“今日は武器召喚授業だから八時十五分までに闘技場に来い”と書いてあつて驚かない訳無いだろ」

「ハハハ、でも、お前は間に合っているから良いんじゃないかね？」

「……多分他の人達は遅れると思うよ。何時も教室に来る時間が八時二十分位だからね」

「…………マジか？」

「マジだよ」

おや、先生が大量の汗をかきだしたぞ。どうしたんだ？

「ヤベエ、あいつ等が遅刻したら……」

「遅刻したら？」

「減給になるだろうがあああああ……！」

「……それは君の責任だろ。彼等は悪くないよ」

全く、ちゃんと連絡をして置けば良いのに。

「クソッ、あいつ等遅れでもしたら反省文五十枚くらい書かせてやる」

うわゝ、最低だゝ。

「フッ、そんな事したら君の頭を開いて直接脳を掻き回してあげよ」

「……お前、本気で怖いぞ」

「それよりも手足を潰して抵抗できないようにして、生きたまま口の中にパイプを突っ込み胃袋に直接寄生虫を入れてあげようか？」

「減給で良いです」

先生はかなりの速さでそう答えた。

そんなに嫌なのかな？まあ、冗談だけど……多分。

そんなやり取りをしていると八時十五分になった。Aクラスの人達はもう全員そろった様だ。しかし、Sクラスは僕しかない。

「シンヤ先生、もう八時十五分になりましたけどSクラスは…」

「全く、しょうがないや——」

「すみません先生、昨日この馬鹿が連絡し忘れていまして今日の授業が武器召喚授業だとは知らないんですよ。ね、せんせい」

「——はい」

「そうでしたか。シンヤ先生、この事はちゃんと校長に伝えておきますから」

「そっそれだけは…」

ハア、何をやっているんだか。

そんな事を思っていると、一人の生徒がこちらに近づいてきた。

「ハッハッハ、Sクラスとあろうものが遅刻なんて……君たちにはSクラスが勿体無いんじゃないかい？ 落ちこぼれクン」

「君は……誰だっけ？」

ズルッ

僕以外の全員がこけた。

「この俺を忘れるだ！？ フツ、まあ良いだろう。俺の名前はギルフォード・アベンジャー、ご存じ、アベンジャー家の後継者だよ」

「……ああ、思い出した。あのクソ貴族野郎か。確か、実技は良い成績を出しているみたいだけど、筆記の方は毎回最下位争いをしている（笑）」

そつだそつだ、こいつは良く僕を落ちこぼれって言っていた奴だ。

「余計な事は思い出すな!!」

「ハア、だったら話しかけないでくれないか？　と言うより視界に入ってこないでくれないか？　君を視界に入れると言う行為は、僕の中では鳥肌ものだからね」

「な、貴様、僕を誰だと思っている!!」

「うゝん、親の脛かじり、七光の馬鹿、何かと家柄を持ちだす実力のないクズ、だね」

「き、貴様！

雷属性初級魔法<ボルトランス>」

雷の槍か……でも、初級魔法じゃ僕の障壁を破る事は無理だね。

「死ね！」

ギルフォードは僕に向かって槍を投げた。

硝子が割れるような音が響き、雷の槍が砕け散る。

「なっ、何だと!？」

「ハア…、この程度の攻撃で僕を倒そうってのが間違いなんですよ」

僕たちは睨みあう。

「二人とも、や——」

「はいはい、止めんかお前達」

シンヤ先生が、もう一人の先生を遮って中断に入った。

「全く…カオル、お前も挑発するんじゃない。君も、魔法を使っているのか？」

「クツ、だがそいつが僕の事を馬鹿にしたから悪いんだ！」

「ハア…、良いかギルフォード。お前の魔法じゃこいつの障壁は破れない」

「な、何だと！ 僕を馬鹿にしているのか！」

ギルフォードはキレたように怒鳴る。

「あのな、俺が最上級魔法を使っても破れなかった障壁を、一生徒がそれも初級魔法で破るなんて不可能に近い」

先生がそう言う。すると僕とシンヤ先生以外の人達が僕の方を見た。

ハア、僕はこう言うのは嫌いなんだけどね。

そんな事を思っていると、闘技場の扉が開いた。

「……………」

「お、お前等遅いじゃないか。もう二十分だぞ」

「……………死ね……………」

五人の蹴りが、シンヤ先生に直撃した。鈍い音が闘技場に響く。

「ゴメワラス!？」

奇声を上げ飛んでいく先生。気持ち悪い。

「お前等…。教師を蹴るとは良い――」

「先生？」

「――ナンデモナイデス」

僕がちよつと笑顔を見せると反論しなくなる。良い傾向だ。

「カオル、お前もう来てたのか。と言うより先生に何をしたんだ？」

シンがそう聞いて来る。

「そうだね。一寸ばかり脅……じゃなくてお話したただだよ」

僕がそう答える。

あれ、何でだろう。皆が苦笑している。

「ハア、もう良い。時間になっているんだ。授業を開始するぞ」

先生の一言、するとAクラスとSクラスの全員が先生の方を見た。

「じゃあまず、武器召喚に付いて……カオル、説明しろ!」

「ハア、仕方ないね」

僕はため息をつきながらその場で話し始めた。

「武器召喚とは、主に武器を召喚する事を指す。別名で武器生成。しかし何故武器召喚と呼ばれているかと言うと昔、拾貳騎士団の団

長が国王から神具、魔具、聖具を召喚したことから言われるようになった。

しかし何故国王から授かったと言われているかというと、元々王国に保管してあった武器だったからである。その事から稀に途轍もない武器を召喚する人もいる。例えば、今から約三百年前、東の国の工藤くどう源三郎げんざぶろうが妖刀・村正を召喚したという事例がある。他にも西の国のシルヴァ・セイリングスが王剣・デュランドルを召喚、南の国のサリム・フレイシアが崩剣・骨喰藤四朗ほねばみとうしろうを召喚。北の国ではイグニス・レイファーンが天守・カフヴァールを召喚したとされている。

しかし、多くの人間は自分に合った武器を生成すると言う形になる。そのため、武器生成とも言われている。この武器生成で作られた武器は魔武器と呼ばれ、能力が付いている。

だが、武器召喚はその武器の元々の能力と、自分に合った能力の二つが付けられる。

最初は自分に合った能力しか使えない。武器を召喚した時点で第一解放、そして、武器の元々の能力を発動できるようになった時第二解放と呼ばれる。さらに、その武器の真の力を発揮できるようになった時を幻壊解放と呼ばれる。

幻壊解放を出来たのは千年前の拾貳騎士団の壹番隊団長と參番隊団長、肆番隊団長と玖番隊団長、そして拾貳番隊団長しか出来なかったと言われている。

以上で良いかい？」

「ああ、上出来だ。ちなみにこの学園の先輩の雪波 鈴は神具・布都御魂を召喚しているぞ。頑張ればお前達も神具とかが出せるかも

な」

先生がそう言う。

「じゃあこの、召喚生成石を取りに来てください」

Aクラスの先生が石を見せて全員に言う。するとAクラスの人達は、我先にと言わん感じで突っ込んでいった。

「うわっ、醜いですね」

「本当だな」

「何でそない急ぐんか…、いまのうちには理解できひん」

「バカ……だから？」

「バカなんでしょうね」

四人からは酷い意見が出ている。

「みつ皆さんそんなこと言っちゃダメです！ たとえ醜い争いをしているどうしようもないクズ共だったとしてもそれは言っちゃダメです！！」

ハッキリとそう言った。

ミリア、君の意見が一番酷いと思うよ。

今この場に居る全員が思った事である。しかし口には出さない。後が怖いから。

そんなやり取りをしていると、人だかりが小さくなったので僕達

も石を取りに行く事にした。

「おつ、お前達が最後か。ほれ、これが召喚生成石だ」

僕達は先生の投げた石をキャッチし、元居た場所に戻った。

「じゃあ、誰から始める？」

アリアの一言。するとシンが――

「全員一緒にやって後で見せ合おう」

――と言った。そして僕達は別々に武器召喚を開始した。

2

「さてと、武器召喚をしるこの事……難しいねえ」

僕はどうしたらいいか分からず悩んだ。一応、やり方は知っているのだが、魔法陣を書くのが面倒、と言う訳で別のやり方にしようとしている。

「そうだ！」

良い事を思いついたぞ。えーと、ナイフを出して――

「ッ…、少し痛いね」

僕は指の先を斬った。そして出てきた血を石に垂らす。その瞬間、光が辺りを包んだ。

「ん、此処は何処かな？」

僕は一面真っ黒な空間に一人たたずんでいる。
さっきまで闘技場に居たはずだが…。

「まあ、気にしたら負けと言う事にしておこう」

僕はそう呟き、辺りを散策する。すると一つの懐中時計が宙に浮いていた。僕はそれを手に取り、蓋を開ける。

そこには子から亥まで書かれた時計があらわになる。しかし、丑以外の文字は全て黒色。丑のみが白色だった。

「？ 何だこれ？」

僕がそう呟く。すると、頭の中に声が響く。

（汝、十二の魔王を手にする資格のある者
人でありながら、魔王を扱える者
魔王を手にし、汝は何を望む？）

恐らく、この懐中時計からだろう。

僕が何を望むか？

「何を望むか……そうだね、強いて言えば平穏かな？」

（その気になれば、世界を制することのできる力だぞ）

「世界を制する？ フンツ、そんな面倒な事、こっちから願ひ下げだよ」

思っ たままの事を言う。世界を制する？ 何故僕がそんな事をし

なければならんだ！ キツイ、ダルイ、メンドクサイ。略して
KDM。

（…お前は面白い

良いだろう！ 我を手にとれ！

そして我を扱え！

今はまだ一つの魔王しか扱えないが、いずれ使える時が来るだろう！

全ての魔王の力を！ 汝ならな！

その瞬間、辺りの空間が弾け、景色が闘技場に戻る。

「……………これが、僕の武器……………魔王十二刀」
まおうじゅうにがたな

3

「皆終わった？」

シンがそう尋ねる。僕を含めて全員がその問いに頷く。するとシンは何処からともなく巨大な剣を取り出した。

皆もそれに続く様に、それぞれ武器を取りだしていく。僕は懐中時計。かなり浮いている。

「じゃあまず俺からな。俺はこの“神剣・エクスカリバー”が出てきたぜ。能力は太陽光を集め、獄炎を作る事だ」

ほう、神具が出てくるとは…。とんでもないな。しかも十二騎士団創設時の一番隊騎士団長が使っていた武器を召喚するとは……………

流石、当時の一番隊隊長の子孫と言ったところだ。

シンの持つ剣は、全長約二メートル、幅が約五十センチの大剣が握られていた。

「重くはないのか？」

僕はそう問う。するとシンは首を横に振る。

「それが、全く重さを感じないんだ。ほら、持ってみるよ」

そう言いシンは剣を僕に渡す。しかし――

「ウワツ、メチャクチャ重い……」

剣の重さは大凡だが四十キロ位。しかし、柄の部分を持つと更にその倍近く感じる。

「ヤッパリ、自分に合った武器が出てくるようだね」

僕がそう言うと、シンはフウンと頷きながら、エクスカリバーを手取る。

「じゃあ、次はうちや！ うちのはスゴイで……何とこの“神杖・ケルキオン”や！ 能力は詠唱破棄と魔法強化や」

詠唱破棄はかなりデカイ。後方援護攻撃を得意とする力ナは、基本的に詠唱の長い超攻撃特化型魔法を良く使用する。そのため、詠唱を破棄した場合それをほぼノータイムで発動してくると言う事である。

さらに魔法強化まで付くと言うと……ある意味最強の武器を手に入れているのかもしれない。

皆は同じような事を思っているのか、ポカーンとした表情になっ

ている。

「ハハハ……カナのは凄いな……」

僕は苦笑しながらそう呟いた。

「レナ、次良いかい？」

僕がそう問うと、レナは頷き銃を取り出した。

「レナのは……この“ファートウム”……。……能力は……魔弾生成……と……魔弾射撃……と……形状変化……の……三つ」

レナはそう言い全長三十センチ程の二挺拳銃を取り出した。

「魔弾？」

僕は気になる単語に質問を入れた。

「……（コクッ）。例えば……撃った後に……銃弾を……操作したり」

成程……。カナもそうだったが、何でこんなに凶悪な武器が出てくるんだ。

「じゃあ、次は私ね。私のはこの“魔槍・ゲイボルグ”よ。能力は突いたら三十の棘となって突いたモノを破壊し、投げれば三十の鏃となって相手を襲うわ」

ほう、これもまたすばらしい物だな。そして突いたモノを中から破壊する能力や投げれば広範囲の攻撃が出来る能力……はあ……、も

うチートバンザイ！

僕は自分のキャラが分からなくなってきた。

「それでは私の番ですね。私のはこの“神弓・アポロン”です。能力は光を使って矢を作る事です」

光での矢の生成。つまり光がある限りは無限に矢を放ち続ける事が出来ると言う事。何とも素晴らしい！ 惚れ惚れする位のチート！ ああ、良い武器を出すのは難しいと思っていた自分が馬鹿みたいだ！

僕がそんな事を思っていると、全員がこっちを見る。ああ、僕だけまだ言っていないな。

「僕の武器はこの、魔王十二刀だ。えっと………斬殺、“斬王・紙”！」

僕がそう言うと、丑の字が消え一本の野太刀が現れる。

「このように十二本の刀を取りだす事が出来る能力。そして、その刀一本一本に能力がある。まあまだこの斬王・紙しか使えないけど」

「全部に能力があるって………規格外も良い所だなおい……」

シンがウワアと言う視線を送ってくる。しかし、君達にだけは言われたくない。

「その言葉をソックリそのままお返しするよ」

僕がそう呟くと、全員クスリと笑い先生の場所に向かった。

雪波姉妹（前書き）

雪波姉妹

1

「カオル！」

「カオル先輩！」

先生の元に行くと、僕は先生の後ろにいた二人の女性に抱きつかれる。

「！？！？先輩に震ちゃん！？」

「やあ、一昨日ぶりだな。後、私の事は鈴と呼べと言っただろ？」

「こんにちはです、先輩」

「そそそ、そんな事より離して下さい！！」

僕は顔を真っ赤にし、全身を硬直させながらそう言った。緊張で震えているのが分かる。

「何故だ？」

「何ですか？」

「むむむ胸が当たっててますすす！！」

「ハハハ、カオルは面白いな！それに、当てているんだ」

「先輩震えすぎですよ（笑）。それに、当ててるんです」

グニツと言う感じで変形している二人の胸。此処までされるのは初めてで、僕の心臓は破裂しそうなくらいドキドキしている。

しかも男子生徒からは――

「何で落ちこぼれのあいつが！」

「いや、今は落ちこぼれじゃなくてもうらやまし過ぎる！」

「二人とも萌え〜。しかしあいつは氏ね！」

「はあはあ…、鈴様に雫タン、可愛すぎるよ〜。ただしあの男は死ね！」

――などと言う声が上がっている。

いやいやいや、僕が悪いの！？　僕が悪いんですか！？

そしてレナ、アリア、ミリアの三人からはどす黒いオーラが出ている。一緒にいるシンとカナが顔を真っ青にして震えている。

「レナが……居ながら……デレデレして……」

「あの女垂らし！　戻ってきたらタダじゃおかない……」

「カオル君が…カオル君がカオル君が！　もうこれは監禁すべきですね……」

三人がそんな事を言っていた事を僕は知らない。

何か寒気がする。兎に角、この二人に離れてもらわなければ、僕が気絶しそう。

「マジで離して下さい……」

僕がそう言うと二人は渋々と言った感じで離れていく。

「むう、わがままだなカオルは」

「そうですよ。嬉しくないんですか？」

「いや、嬉しくないと言ったら嘘になりますが……僕が持ちそうにないので……」

僕は顔を真っ赤にしながらそう呟く。

「と言うより、何で此处にいるんです？」

「そうだ。先――」

「鈴！」

読心術でも持っているのか？ まあ良い。鈴先輩は一つ上だし、零ちゃんに関してはまだ中等部だ。

「私達が居る理由は、カオルと――」

「お前と戦ってもらったためだ」

「――言葉を遮らないでくださいよ」

「ああ、成程……って、何故に何だと何ですと！」

オツと、うつかり三段活用を……じゃなくて、何で二人で僕に？

「いや、お前Sクラスの五人と戦って一人で勝ったからこの雪波姉妹二人と戦ってもらおうかなと思ってな。ちなみにこの二人はあそこの五人より強いぞ」

「いやいや、そんな事は知っている。」

「この間、鈴先輩とは戦って引き分けているんですが……」

妙な沈黙が僕と先生を襲う。

「…………マジで？」

「マジで」

僕がそう言うと、先生は僕から視線をずらし、頬を掻きながら苦笑する。

「ハハ、ハハハハ……」

「…………先生……」

僕はジト目で先生を見続ける。すると先生が――

「あーもー五月蠅い！ とつとつやられて来い！！」

「そんなあんまりだ！」

僕は先生に舞台に投げられる。

「じゃあ、ルールを説明する。どちらかが降参、又は気絶、又は転移されるまで続けてもらう。ちなみにこの闘技場では致死量のダメージを喰らえば自動転移されるようになってるから。勿論、死にはしないぞ。だから思う存分やってくれ。では、始め！！」

有無を言わさずと言う感じで、先生が即座にルールを説明し、ルールをした。

「僕に人権はないんですか！」

僕は先生に向かってそう言った。

「フフツ、そんなに余裕で良いのかなカオル？」

「先輩、ボク達を舐めないでくださいね」

何で！？

「何故に二人は戦闘態勢なの！？」

僕がそう言うと、二人は当然のように口を開く。

「そんなの」

「カオル先輩が」

「好きだからに決まっているじゃないか（じゃないですか）」

……堂々とした告白をありがとう。しかし、理由になっていない！

「言葉のキャッチボール！　と言うか戦うしかないのか！？」

僕がそう言うと、二人は頷く。

あーはい、わかりました。

「もう良いや…（泣）。魔王十二刀の？、斬殺…“斬王・紙”！」

僕の手には細身の野太刀が現れる。

“斬王・紙”。ただ斬る事だけに特化した刀で、能力に完全切断、想像斬撃がある。

完全切断は、召喚武器以外は簡単に切り裂く事が出来る能力。想

像斬撃はその名の通り、頭の中で思い描いた斬撃を飛ばす事が出来る能力。

「私も行くぞ？ 来たれ、布都御魂！」

「ボクも行くよ？ 童子切！」

二人の手に刀が現れる。そして――

「喰らえ！！ 双神抜刀<鬼神連撃>！！」

二人は同時に逆方向に飛び、僕に斬りかかってきた。

「チツ、八獄六寒・青蓮！」

障壁を展開し、二人の攻撃を防ぐと同時に、二人を峰で打ち、打った部分めがけ紙を振るう。

二人はそれを紙一重で避けたが、少し掠ったようだ。

「ッ…、やってくれるな！」

「この程度じゃ終わらないよ！」

青蓮は一撃目の打撃で青あざを作り、二撃目の斬りでその青あざから血が噴き出るようにする技。本来ならばかなり脅威となる技なのだが、当たらなければ意味が無い。

「今の一撃が決まれば楽だったのに…残念です…」

僕は鞘に紙を納め、抜刀の体制を取る。

「八獄七熱………大焦熱！」

斜め下から上に斬りあげるように刀を振るう。鉄が擦れる音と、空気を斬った音が闘技場に響く。

完全に静まりかえる闘技場。しかし、一人の生徒が笑いだす。僕を落ちこぼれだと言っていた、ギルフォードが笑いだす。刀を振っただけで何も起きていないじゃないかと大笑いする。それにつられ笑う者が現れ、闘技場が笑いに包まれる。

しかし、僕と対峙する雪波姉妹、Sクラスの皆、そして僕の担任のシンヤ先生は笑わずに、何が起きたかを察しようとしている。

「……罪には罰を、墮落せよ大焦熱地獄まで」

僕はそう一言言い、刀を鞘に納める。その瞬間――

――リイン――

――鈴の音の様な音が闘技場を包む。その音で笑いは止まり、雪波姉妹は何かを察したのか、左右に急いで飛ぶ。顔を青くしながら。

その直後だ、闘技場に広範囲殲滅兵器がぶち込まれ大爆発を起こした様な轟音と、地割れでも起きたかと思う位の巨大な溝が闘技場に来た。

「!?!?!? 反則じゃない!?!」

「先輩滅茶苦茶です〜!」

雪波姉妹は顔を一層青く染め上げ、此方を見る。

「おいおい、どんな技使ったんだあいつ……」

「敵にだけは回しとうないな」

「……………!？」

「学校を壊す気なのかしら……」

「ほえ……、凄過ぎです……」

五人はポカーンとした表情を浮かべ、此方を見る。

「ああああああ!! 闘技場斬りやがってええええ!! 給料が
ああ! 俺の給料が減るかもしれねえじゃねえかああああ!!」

「いやシンヤ先生!? 給料より生徒の心配をしましょうよ!!」

教師は約一名、頭を押さえ叫びながらのた打ち回り、もう一人の
先生はそれにツッコミを入れていると言う何とも言えない状況だ。

2

暫くして全員が落ち着きを取り戻す。雪波姉妹も何とか戦闘態勢
を整え、刀を構える。しかし――

「ごめん、降参する」

僕はそう一言言った。

「…………ハア？」

「……ハエ〜？」

二人はポカーンと言う表情になる。闘技場にいた殆どの人がそう
だ。しかし、シンヤだけは見抜いたのか此方に近づき、二人の勝利
をコールする。

「勝者、雪波姉妹」

「え？ いや、先生？ 一体どう言う事だ？」

「そうですね。カオル先輩はまだ戦えるんじゃない……」

闘技場の全員が疑問に思う。闘技場を斬り裂いた様な技を使う者
が、何故此处に来て降参するのかと。

「おい、カオル。お前の腕を見せてやれ」

シンヤがそう言い、僕の方を見る。僕は一回頷くと、ローブの中
から腕を出した。

「……?!?!?」

雪波姉妹は目を見開き絶句した。

まあ無理もないだろう。血を噴き出し、あらぬ方向へとねじれ曲
がっている僕の腕が其処にあるのだから。

「いやあ、まだ不完全だから使ったらこうなる事くらい分かってい
ただけど……つい」

「全く、怪我をするな怪我を。もしかしたら俺の責任になって治療費を持つ事になるかもしれないじゃないか」

本当に教師なのかこの人は…と言う疑問が闘技場の全員に浮かぶ。

「さてと、僕は医務室へと行ってくるよ。あそこならこの腕を治す位できるだろうし」

「ああそうしろ。迅速にな。下手したら給料が減るかもしれんから」

僕はシンヤにそう言われたので、すぐさま医務室へと向かい治療を受けた。

3

今回の後日談のだが、僕はレナ、アリア、ミリアの三人にこれでもかと言う位説教を受けた。その時間何と一人に付き約三時間。しかもその間ずっと正座と言う拷問付きで。更に完成するまでは絶対にあの技を使うなと約束までさせられ、契約書まで書かされた。僕の拇印付きで…。

何とも納得のいかない結果となってしまった。

そして余談なのだが、雪波姉妹が積極的に僕に会いに来てはくっ付いて来るようになった。正直、以前にまして辛い（半分は嬉しい）日々を送っている。ちなみにこの事でレナ、アリア、ミリアの三人も余計にくっついて来るようになったのも僕の悩みの一つになってしまった。

幼なじみ（前書き）

更新です。

幼なじみ

1

朝起きて、一通り用意をし、学校に行く。これが僕の四年間変わらないであろう日常。学校に行き、授業を受け、放課後になったら寮に帰る。何事もなく、ただ淡々と過ごして行くはずだった僕の計画。その計画が、経った今、音を立てて崩れ去った…。

「何？ 何なの？ 何なんだい？ その表情は？」

「一体どう言うこののかな？ アタシが居ない間に良い御身分になつてえええ！！」

何で…。

「顔色悪いよ。大丈夫？ 大丈夫かい？ 大丈夫ですか？」

「いつからカオルは女誑しになったのよ！」

何でこいつ等が…。

「まあ大丈夫なら良いや、良いけど、良いですが」

「昔はアタシしか…」

「何で二人が此処に居るんだい！」

僕はそう男と女の両方にいう。

「何でと言われても……ボク達がこの学園の生徒だから、ですから、なんだから」

「まあ、末端のFクラスだから知らなくても無理はないけどね……じゃなくて！　いつからあんたは女誑しになったのよ！」

女誑しになったつもりはない……。

「……ちよつとええか？　カオル、あの二人誰や？」

カナが全員を代表して聞いてきた。全員興味しんしんと言った感じで此方を向いて来る。

はあ……、紹介するしかないみたいだね。

「オイ、^{なげき}歎、リリナ、自己紹介をしてくれ」

僕は二人に聞こえるようにそう言う。すると歎はボクが最初にと言い、一歩前に出る。

「ボクは歎、^{くるいごき}狂咲 ^{なげき}歎。一年Fクラスだよ、ですよ、でございます」

歎はそう言つて頭を下げる。

「ボクはカオルの幼なじみ（男）なんだ、なんだよ、なんですよ。よろしくね」

自分の自己紹介が終わると、歎はリリナを前に出す。

「アタシはリリナ・ヴァンウィンクル・クルセイディア・オーディアン。リリナで良い」

リリナはそう言いシンとカナ以外の三人の方を向く。

「カオルの幼なじみ（女）なの。仲良くしましょう」

……なんか凄いオーラが出ている様な気がするのには恐らく気のせいだろう。そして三人から何かすごいオーラが出ているのは気のせいだと思いたい。

「クツクツ、まだ女性が苦手なの？　なのか？　なんですか？」

「い、いや、ある程度離れていたつもりだったんだが……」

「まあ、今のカオルは昔では想像ができない位女性と普通に接しているし、いるから、いるんですし、問題ないと思うね、思うよ、思いますよ」

まあそうだろうな。昔はすぐに顔を赤くし逃げていたから……。

「で、歎。お前のその口癖は治ってないと」

「口癖？　ああ三段活用（偽）の事かな？　事なの？　事ですか？」

「ああ、それだそれ」

普通ならあり得ない口癖だぞ。

「いや、だってボクは何のとりえもないから、せめてこれ位しない

と影が薄く、薄くて、薄過ぎて、存在が分からないから……」

いや、かなりのイケメンだし……。まあ影が薄いことは否定できないが。

「しかし…、まさか君がSPECIALだなんて…」

「スペシャル？ 何だそれ？」

「ああ、カオルは分からないか。いい、SPECIALはボク達FクラスのメンバーがSクラスに当てた別名みたいなものだ、ものの、ものですよ。SクラスのSとSPECIALのSだろ、Sですよ、Sだから」

成程。それでスペシャルか。

「まあここでも同じFクラスになると思っていたんだけど……、君はSクラスになるし、なるから、なったでしょ。絶対拒絶型の魔法使いになった、なったし、なっただろ」

正直言えば、自分自身が一番意外だったけど。まさか僕が絶対拒絶型だなんて、夢にも思わなかったから。

「でも、ボク等はボク等で楽しくやっているし、カオルもカオルで楽しくやっているようだし、ようだね、ようだから」

「…確かに、退屈はしないしね」

僕は暫く歎と話し、リリナは他の五人と話し仲良くなっていた。そして二人は自分のクラスに戻ろうと、ボク達のクラスを出る。その時だ。

「痛!？」

「ウワツ!？」

リリナが誰かとぶつかった。

「……ッ、すいません」

リリナは頭を押さえながらその人に謝る。

「ツテエな! この僕にぶつかってタダで済むと思うなよ!」

この喋り方、そしてこの声、何処かで聞いた事が…。

「この僕、ギルフォード・アベンジャー様にぶつかってタダで済むと思うな!」

…… ああ、思い出した。闘技場の時の馬鹿だ。

「こいつ誰? 誰だ? 誰なんですか?」

「カオル、このバカっぽいのは誰なの?」

二人はギルフォードを見ながらそう言う。

いや、確かにバカっぽいのは認めるが……、本人を前にして言うか?

「き、貴様等！ 良く見たらその制服、落ちこぼれのFクラスじゃないか！ その落ちこぼれが僕をバカだと！」

ギルフォードが二人を指差してそう言う。その瞬間、今までにこやかだった二人から表情が消え、冷たい空気が辺りを包む。

「…………カオル、こいつ今何て言った？ 言ってる？ 言いました？」

「カオル、こいつ何て言ったの？」

無表情で冷たい視線をギルフォードに向けたままそう冷たい声で聞いてくる。

「あ、いや、落ちこぼれだって…」

僕は少し戸惑いながらそう答えた。

「そうだ、そいつが言ったように貴様等は落ちこぼれなんだよ！ 弱い奴は黙って僕に跪けばいいんだ！」

ギルフォードがそう口にした瞬間、骨に硬い何かが当たる鈍い音と、ギルフォードの血が辺りに散った。

「何て言った？ 言ったの？ 言ったんですか！ ボク達を落ちこぼれだと…」

歎はそう言いながらギルフォードに近づき、小さな鉄の鎚を振り下ろす。しかし、それはギルフォードの頭をすり抜ける。

次にリリナが動いた。するとギルフォードはXの字で空中につり

上げられる。

どう言う事だ！？ 二人は何を！？

「オイ糞貴族、教えてやる、やろう、やりましょう。ボク達FクラスのはFはFreelance（粗悪品）のFじゃない。Folie（狂気）のFなんで、なんだよ、なんですよ」

そう言う。すると再び鈍い音と、血が飛ぶ。歎はまた一連の動作をする。

「な、何やってんだよ歎、リリナ！」

僕はそう叫んだ。すると二人は、いつも通りの顔で僕の方を見る。

「あ、そっか。カオルは知らない、知らなかった、知りませんね。ボク達の能力の事を」

「能力だと？」

すると歎は淡々と話し始める。

「魔力が無い、もしくは極端に低い人、魔力はあっても魔法は使えない人。そんな人の中には別に能力を持った人が居るのさ、居るのだ、居るんですよ。それがボク達Fクラス」

「そう、そしてアタシは“人形使い”と言う能力を持っているの。文字通り人間を人形のように扱う能力。まあ指から魔力系の類いを出して、それを絡めて操っているんだけど」

「そして僕は“出オチ”と言う能力。まあ名前はアレだけど、能力

の内容は因果律の反転って言うチートなんだ、なんだよ、なんですよ」

そんな事を話していると、他の生徒から事態を聞きつけた教師がやってくる。二人はそれを見て、また今度と言いついて行った。

「……Fクラスって…チートの集団なのか？」

ギルフォードは無視して、僕はそんな事を思っていた。

サバイバル 〓初日〓（前書き）

内容は前回の物と殆ど変えておりません。

サバイバル ～初日～

1

今日からクラインド杯の為に学年での予選が始まる。それが一週間耐久サバイバル。六人一組のチームで一週間学園所有の森の中でサバイバルを行う予選だ。何故六人一組かと言うと、拾貳騎士団の頃、騎士団隊長が六人ずつにわかれて模擬戦をしていたかららしい。その風習が今も続いているのであろう。

基本的な陣形は、前衛二人、中衛一人、後衛三人らしい。僕達の場合は、シンとアリアが前衛で攻撃に徹底、僕が中衛で前衛、後衛の二つの防御を担当、出来るなら攻撃も、そして後衛はカナの大魔法、レナの召喚魔法と魔弾攻撃、ミリアの回復となるだろう。

そんな事よりも――

「はあ……、サバイバルって……、僕以外にまともにできる人いるのかな？」

そう、僕は子供のころから修業でよく野宿をしているし、テントを持っていなかったときは自分で家を作ったりしていた。食料も勿論自給自足、毒草や毒キノコは勿論知っており、毒を持った魚の食べへてはいけない部位も知り尽くしている。

「……見た感じ、今までテントで寝た事はあるけど本当に野宿した事はありませんって顔しているし……」

僕はそんな事を思いながら周りを見渡す。

「よ、お前は何時も早いな」

「おや先生、おはよう」

「ああ、おはよう」

後ろにいた先生にあいさつを交わす。

「しかしサバイバルねえ。お前、サバイバル出来るか？」

「フツ、愚問だよ。むしろ僕よりサバイバルが上手い人はいないんじゃないか、学生レベルではね」

まあそうだろう。両親を早くに無くしてそれから修業ばかりしていたからね。サバイバル知識は結構なモノだよ。

「そうか」

「ちなみに、食料以外なら持ち込んでいいのだから？」

「ああ、飲料もダメだぞ。それ以外ならある程度のモノは持ち込んで良いぞ。サバイバルナイフとか。あ、だがテントとかはダメだぞ」

「それ位はわかっているよ。それに、仮にテントを持ちこむ事を許されていたとしても、戦いありのサバイバルにテントを持ちこむなんて事はしないよ」

当たり前のことである。テントなんて重たい物を持っていてまともに戦える訳が無い。

「まあそつだな。じゃあ寝る時はどうするんだ？」

「それこそ愚問だよ。僕の今まで学んできたサバイバル技術を使って寝床を作るのさ。僕は防御魔法以外使えないからね。だからここ周辺の地形や洞窟、河川のありかなど全て記憶しているし」

「…お前、家でも作る気じゃないだろうな？」

「いや、そのつもりだけど」

先生は啞然とし此方を見る。

「…本当に出来るのか？ いや、出来たとしても家なんて作ったらすぐ襲撃されるぞ」

「だからこそ僕の実力の出番じゃないか。絶対拒絶のね」

「まさか家の周りに障壁を張り続けるつもりじゃないだろうな」

「そのまさかさ」

まあ、無理な事じゃないし、僕が中等部時代に学んだ技術を活用して僕の魔力を使い障壁を張り続けるダミー人形を配置すれば問題が無い。

「本当に規格外だな」

「フツ、今さらじゃないか」

「それもそうだな…クハハハハハハハハ」

「ええ、その通り…フハハハハハハハハ」

僕達は暫く笑い、先生がその場を離れて行った。

「おゝい、カオル！」

後ろから足音と共に声が聞こえてきた。ようやくシン達が来たのだろう。

「おはようカオル！」

「おはようさん」

「……おはよ」

「おはよう、相変わらず早いわね」

「おはようです」

五人があいさつをしてくる。

「おはよう」

僕も一言挨拶を返し先生に全員来た事を報告する。

「皆、サバイバルした事あるか？」

僕の問いに全員が首を横に振る。

「でも……カオルが……居れば……大丈夫……」

レナがそう一言。するとレナ以外はと言う事だと首を傾げる。

「カオル……サバイバル……得意。……こないだ……手際……良かった」

?? ああ、修業に行った時か。

「ん？ こないだってと言う事だ？」

シンがレナに問う。

「こないだ……二人で……修業した……。……連休の……時に」

「何だと!？」

「何やて!？」

「本当!？」

「良いなあ……私も行きたかったです」

それぞれが反応を示す。そして此方を向く。

「カオル? まさかレナに手えだしとらんよなあ？」

カナがニヤニヤしながらそう聞いて来る。

「出してないよ」

「何でださへんねん！」

「どう言っ事ですか!？」

カナの意味が分からないツツコミに、ツツコミを返す僕。アリアとミリアはレナと話しをしている。シンは一人寂しく――

「良いもん……寂しくないもん……」

とか言いながら、のの字を書いている。

「まあええわ。で、カオルハはサバイバルの知識とかもつとるん？」

「ん？ ああ。大体はね」

そう言って自分の持っている知識を軽く説明する。

「……………カオルが居ったら、サバイバルでは問題ないやん……」

僕達がそんな話をしていると、横で話を聞いていた全員が期待の目を向けてくる。

「ハア、まあ初心者に負ける気はしないけど……僕がやるのは寢床探しと寢床作り。君達が食料を探すんだよ」

僕がそう言っると全員が頷く。どうやら物分かりが良いみたいだ。流石はSクラスと言ったところであろう。

そんなこんなで話しをしていると、サバイバルの説明が始まった。

「えー、第一に死なない事が大切です。だから皆にはこのペンダントの着用を義務づけます。このペンダントは致死量のダメージを受けたら割れ、転移されるようにしてありますので。勿論、ペンダントが割れ転移してきたら、サバイバルの裏方の手伝いね」

そんな感じの説明を長々と受ける。流石に眠くなってきたな。暫く説明を聞き流していると、どうやら終わっていたようだ。

「以上で開会式を終わります。では、サバイバル訓練を……………開始します！」

そう言った瞬間に、僕たち以外の生徒は森の中に我が先にと言う感じで入って行った。全く、全員事前に確認していないのかな？まあ、この辺の地形は僕はもう把握しているから良いけど。

僕達は全員が入って行くのを確認した後、森に入った。

2

「……………此処から東に二・五キロ、そしてそこから北に二キロの所に洞窟がある。其処に行こう」

僕がそう言うと、全員が驚いた顔をしたがすぐに強化魔法をかけて、走り出した。

はあ…、僕は強化魔法が使えないんだけどな…。そんな事を思いながら僕は皆の後についていく。

「……………何でお前は着いてこれてんだよ…」

シンが走りながら僕にそう聞く。

「ん？ 何かな？」

「いや、最初強化魔法をかけて勢いよく走りだしたから、カオルが付いてこれるか心配したんだぞ！ それを何事もない様に平然とついて来るなんて……。お前、百メートル走何秒だ？」

「百メートル走？ 確か…九秒七八位だったと思うよ」

「速！？ 素でそれか？」

「まあね。縮地を使えばもつと速くいけるけど…、こんな感じに…」
そう言って僕はシンの百メートル程前に行った。

「お前はバグキャラか！？」

そんな感じのやり取りをしながら、僕達は洞窟の前に着いた。
幸い、僕たち以外に生徒はいない。僕はミリアに頼み、辺りの探知をしてもらう。また幸い、周辺には生徒はいないらしい。

その他にも、この洞窟の奥に水が湧いている場所がある。そこからこの森に川が流れているのだ。しかも森につながる川は、地下を通って再び顔を出すので、水の出る場所をたどっても此処にはたどり着かないと言う訳だ。

「さて、まずは…」

僕は一枚の紙と、六つの指輪を取りだす。

「ん？ 何よこれ？」

アリアが全員を代表して聞く。

「これ？ これはサバイバル用品の一つさ。今からこの洞窟の入口にこの紙を貼る。すると――」

洞窟の入口がなくなる。全員は驚いた顔をして、入口のあった場所に手を触れる。

「さわ……れる……」

「そう、これは幻影結界を作り出す御札みたいなものさ」

「いや、でもこれは反則じゃないんですか？」

反則？ 何で反則何だ？

「先生が持ち込んでいけないと言った物は、テントに食料飲料、そしてテントや食料飲料を作り出す、もしくは取り出す事の出来る魔法具等。サバイバル用品の御札を持ちこんではいけないなんて言われてないじゃないですか」

僕が笑顔でそう言う。すると皆は納得したように頷く。まあこの御札結構高価なものだから、誰も持ってこないだろうと思っているんだろう。

ちなみにお値段は一枚につき五百万リット。そして指輪が二つ付いている。指輪を一つプラスしていくごとに十万里ット増えていく。合計で五百四十万里ット。しかし、この札の効果は剥がすまで続くので、このサバイバル期間中はずっと使える。

僕は全員に指輪を渡し、その説明もする。指輪をしていれば、洞窟の入り口も見えるし、結界の効果も受けない。

「さて、此処から仕事を分けよう。今日一日を有意義に使わせても

らう。僕が寝床作り、レナ、アリア、ミリアが洞窟の奥で魚と水を取ってきて。それと、洞窟の奥の方の天井に穴があいているから、この札を貼って来てくれない？」

僕がそう言うと、三人は頷き、すぐさま行動を開始した。洞窟の奥なので、札を貼ってしまえば襲撃される心配はない。

しかも、洞窟の奥の穴の方は、外の山の上にある。まだそこまで生徒は行っていないだろう。

洞窟の中でも坂道と平坦な道では、平坦な道の方が移動速度は速い。だから心配はないだろう。

「じゃあ次に、シンとカナは森の方で片っ端から木の実やキノコとか食べられそうなのを取ってきて。後で僕が食べれるかどうか見るから。あんまり遠くに行かなくても良いから」

僕がそう告げると二人は頷き森の方へ出て行った。さてと僕は・
・寝床を作りますか。

僕はそう思い、近くにあった倒れた木を全て取ってきて加工する。足りない分は木の多い場所から木を切り取ってくる。

そしてそれら運び、洞窟の開けた場所に置いては取りに行き、また置いては取りに行きと十往復した。所要時間は約十分。

「えっと、まずは“斬王・紙”！」

僕は魔武器を取り出し、辺りを完全に平坦にするため、下の岩を斬って行く。そして斬っては蹴り飛ばし、斬っては蹴り飛ばしを続けて約二十分。ようやく辺りは平坦になった。

僕は持ってきた木を、組み立てて行く。そして言えの骨組みを作り上げるのに一時間。

「さてと、此処からは…」

僕は一枚の床と書かれた札を取りだす。そしてそれを近くにあった木に張り付ける。すると木はひとりでに動き、骨組だけの家に床をつくった。同様に壁、屋根等書かれた札を木に張って行く。再び木材は勝手に動き、壁等を作って行く。そして大体家が完成したので細かい補正などをし、最後に耐震、耐熱、防寒等の魔法符を発動させていく。

二時間後

洞窟内の少し開けた場所に家が建っていた。結構立派な家だ。勿論、カオルが建てた家である。ゴツゴツだった足場は、綺麗に整地され、バランスがしっかりとれている。

「フウ、久々に家を建てたから疲れたね。おや、これは」

足元に落ちていた石を拾う。

「リーメンラビス光石じゃないか」

光石とは衝撃を与えれば発光する石。その光の強さは大体蛍光灯と同じくらい。見つかりやすいが、かなり便利な石である。サバイバル時には欲しい逸品である。発光時間は大体一ヶ月間。一度衝撃を与えれば光り続ける。

「他にもないか探してみるか…」

僕はそう思い、辺りを散策し始めた。

「小一時間で炎鉄、氷鉄、闇石にそよ風白銀、暖氷石までも…。此処は石を集めるにはもってこいの場所だね」
イグニース・フダツネ・スネツネ・ホラビス ウェントウス・レカハダグラ・ネエナス

これだけあればまともな生活ができる。炎鉄は結構な温度が出る鉄で料理に仕えるし、氷鉄はその逆で冷やす事に特化している。闇石は光石に近づければ光を押さえてくれるし、そよ風白銀は扇風機代わりに使える。暖氷石は魔力を加えればお湯になるし問題が無い。

「しかも第三魔法使い（ティルティウムマガ）まで落ちているだねんて…」

第三魔法使いとは言わば分身を作り出す石と言っても過言ではない。してほしい事を思いながら魔力を流すと、形は石のままだが思い通りに動いてくれる珍しい鉱石である。

ちなみに、何故第三魔法使いかと言うと、世間一般で言う人間、獣人、神人、魔人の魔法使いは第1魔法使い（プリームマガ）と呼ばれ、魔法を使う上記以外のモノを第2魔法使い（セクンドウムマガ）と呼ぶ。

「これで防御障壁を僕の力で張り続けてくれる媒介となる。うん、最高だね」

そんな事を呟いていると、奥の方からレナ、アリア、ミリアの三人が、入口の方からシン、カナの二人が戻って来た。

「おや、お帰りなさい。思っていたより魚も木の実やキノコも取れているみたいだね。あ、それと、此処の水は飲めるよ」

僕はそう言つて全員の帰りを喜ぶ。しかし、全員はポカーンとした表情で、無言だ。暫くするとシンが口を開いた。

「これ……作ったのか……？」

シンは家を指差し、そう尋ねてくる。

「何を言っているんだ。当たり前じゃないか。こんな所に普通家はないだろ？」

僕の一言で、再び沈黙が訪れる。そして――

「ハアアアアアアアアアア!?!?!?」

……!?

洞窟に声が響いた。四人は大声で叫び、一人は目を見開いている。

「どうしたんだい？ あ、もしかしてこの程度じゃ不満だったかな？」

それは申し訳ない事を――

「いやいやいや、凄過ぎるだろ!？」

「そや、普通の家やないか!？」

「流石……カオル」

「本当に……規格外ねあんたは……」

「ふえゝ…、**凄過ぎ**です」

何だ、不満を持っていた訳じゃなかったんだ。それなら、僕も嬉しいね。

「じゃあ入ろうか」

僕は効果のある程度持続させるために、大量に魔力を流し込んだ

第三魔法使いを家の四方に置き、中に入った。

家の中は光石の明かりで普通の家と殆ど同じ位明るくなっている。6LDKなので一人一部屋あり更に、ベッドが付いている。風呂も勿論ある。

『・・・・・・・・』

「ベッドには葉布フオリウムパンヌスが敷いてあるからある程度は快適に寝る事が出来る筈だよ」

『・・・・・・・・』

また沈黙。今度こそ不満か何かかな？ ならば申し訳ないな…。

そんな事を思っているとシンが僕の肩に手を載せ――

「チートか？ チートなのか？」

と言ってきたので、とりあえず殴っておいた。

「……まさかサバイバルでお風呂に入れるだなんて…」

アリアを始め女性陣が喜んでいた。

やっぱり風呂は大切だねよ。

この後、僕はシン達が取ってきた食材で料理をし、風呂に入つて一日目を終えた。

ちなみに、シンの持ってきた食材の半分以上は猛毒で食べる事が出来ないものだった事を伝えておく。

サバイバル ～二日目・三日目～

1

二日目

サバイバルが始まり一日目が過ぎた。今日から本格的な戦闘が始まるだろう。早い所は今日の深夜一時くらいから行動を開始しているようだ。しかし、僕達の居る場所は気付かず、他の班と潰し合っ
てくれているようだ。

このサバイバル訓練は一チーム倒すごとに十ポイント。そして僕達Sクラスを倒したチームは六十ポイント貰えるらしい。しかし、簡単にそれをさせないのが僕達Sクラス。朝から僕達が行動を開始すると、Eクラスの第三、第四チーム、Bクラスの第一、第三チーム、Cクラスの第八、第六チーム、Aクラスの第二チーム、が襲撃を仕掛けて来たので全て返り討ちにした。恐らく、僕達を倒せば一気に六十ポイント貰えるのでそれに釣られたのだろう。同じ学年だから、力で差があるなら数でその差を埋めようと二チームで来るクラスもいくつかあったが、そのどれもが十分持たなかった。

ちなみに、Sクラスは第一チーム、Aクラスは第五チーム、Bクラスは第八チーム、Cクラスは第十チーム、Dクラスは第十一チーム、Eクラスは第八チーム、Fクラスは第三チームまである。

そして、現在のランキングは一位Sクラス(七十ポイント)、二位Aクラス第一チーム(十ポイント)、同率二位Fクラス第一チーム(十ポイント)、以下〇ポイントとなっている。

「ふむ、流石にあれだけ返り討ちにしたから襲撃してくる班はないね」

「まあ、皆開始二日目で終わって後雑用なんてものが嫌なんだろう？」

シンがそう言って、手に持っている水筒を開け、水を飲む。

「……誰？」

レナは一人後ろを向いてそう呟くと、手に持っていた魔武器のファートウムを容赦なく二十メートルくらい先の茂みに向かって放った。しかも形状を神人が作り出した武器の自動小銃変えている。それもフルオートで。弾を魔力（下級魔法一発分＝弾百発）で作る事が可能なので、容赦なく撃ち続ける。しかもレナは魔人で、その中でも膨大な魔力を持った部類となっている。そのため、魔力温存？何それ的な感じで銃を茂みに乱射し続ける。

「まだ……出て……来ない。……魔弾・Full obsession
e」

レナはそう言うと、ファートウムの形を巨大なライフルに変える。

「！？ アンチマテリアルライフルですか！？ 初めて見たです……」

ミリアは神人の血も引いていて、科学の知識も勉強しており神人が作っている武器の知識をある程度持っている。そしてレナの持っているファートウムを物珍しそうに見る。

「皆……伏せて……」

レナがそう言ったので、僕達は地面に伏せる。すると次の瞬間、森全体に巨大な爆発音が轟いた。そして二十メートル位先にあった茂みはあとかたもなく吹き飛んでいた。

暫くすると――

『Dクラス、第十チーム全滅。Sクラスの合計ポイントが八十となります』

と言う放送が森に響いた。

この時僕は、レナの凄さに気付いた。そして同時に、絶対に敵に回してはいけないんじゃないかと思った。

「おお、レナちゃん凄いです」

ミリアが目をキラキラさせ、レナを見る。レナは一言ありがとうと言うと、ファートウムを通常の形に戻した。そして僕達はその場から歩き出した。

2

暫く歩いていると、僕はある珍しい木を発見する。

「ん？……あれは確か……」

「どうしたんだ？」

シンが訪ねてくる。僕はそれを聞き、一本の木を指差す。そして僕はその木に近づき、木の実を一つ手に取る。

「ヤッパリ！ これは甘実じゃないか！ うん、これが有ればデザートがより一層美味しくなるぞ！」

甘実とは、名前の通り甘いシロップ等が詰まった実の事だ。赤色

の実はメイプルシロップが、黄色の实には蜂蜜が、白い实にはホイップクリームが、黒い实にはチョコレートシロップが入っている。僕は甘実の説明をし、シンに物質保存の補助魔法のボックスを使ってもらい、甘実を大量に手に入れた。

「あ、そう言えばさつきDクラスのチームを倒してから、敵にあつてないね」

僕は甘実を取りながら、そう一言呟く。

「皆、萎縮してるんでしょ？ 迂闊に動けばやられるって」

アリアが口を開きそう言った。

「まあ、少し地形に詳しい奴や、戦闘に詳しい奴なら、岩場や山頂に拠点を設けていると思うわ。でも、私たち自らが其処を目指して進軍しなくても、最終日に近づくにつれて、私達を襲撃する班が続々と出てくるはずだわ」

僕を含め、この場にいた全員がおおっと目を見開く。アリアは頭が良く、戦闘になると第三者の視点で物事を言う事が出来る。また、戦闘時の作戦や、皆の戦闘配置、そして何時、何処で、どうやって敵を撃つかを考える事が得意だ。

「さてと、今日は拠点に戻りましょう。魚は昨日食べられなかった分があるし、今日取るべき食料は手に入れたわ。まあ、おまけも付いているけど…」

アリアがそう言うと、全員が僕を見る。
ん？ 何だろう？

「自分何で何だろうって顔してんねん……」

「いや、だって僕には思い当たるふし——」

「だったらその抱えとるデカイ熊は何やねん！」

んー、貴重なタンパク源じゃないか。それに、魚だって何時までも持つわけじゃないし、魚ばっかりだと飽きるし。

「まあ美味しいから良いと思うけど？」

「カオル………熊………食べた事………ある？」

「ああ、勿論。ちゃんと血抜きをして、内臓とかも取ってしまえば臭くないし、結構美味しいよ」

僕はそう言い熊を抱え直す。

レナ以外はため息をつき、何も言っておなくなった。

「どうしたんだろう？」

僕はそんな疑問を抱きながら、拠点へと戻った。そして洞窟の奥の方で、熊の血抜きと内臓を取る作業を行い、今日は終了した。

3

三日目

この日は僕が一人で行動する事になった。理由としては、シンの

腹痛だ。今朝起きたら、シンが呻いていたので、理由を聞くと、お腹が痛いとの事。そのため、薬草を探すべく僕が散策しているのだ。薬草は素人が見つける事は難しく、更に似たような毒草まであるから、女性陣に散策してもらうのはご遠慮いただいた。

ちなみに、シンが腹痛になった理由は昨日の晩のつまみ食いだ。まだ調理していない食材をそのまま食べたため、食あたりしたのではないかと考えられる。

薬草も今さつき手に入れた。だから後は拠点に戻るだけだった。しかし、僕は拠点に戻る前に面倒事に巻き込まれたようだ。今僕が面倒だと思っている事は、目の前にいるギルフォードだ。周りにギルフォードの仲間はいない。そしてギルフォード自身もボロボロ。恐らく仲間を置いて逃げて来たのだらう。

「やあ落ちこぼれ。よく生き残っていたね」

ギルフォードはそう言い強がるが、見た感じではほぼ满身創痕。僕が此処でリタイアさせてあげても良いが、それすらも面倒くさく感じる。

「…、君に言われる筋合いはないんだけどねえ。それに、僕は君みたいな親の七光君が生き残っているのが不思議で不思議で」

とりあえず嫌味を返しておく。するとギルフォードは怒りに顔をゆがませる。

「クッ、お前は本当に僕を怒らせるのが好きなようだね!」

そう言ってギルフォードは自分の武器を呼び出す。

「斬王・紙!」

僕は自分の武器を取り出す。そして、ギルフォードが攻撃を開始しようとした瞬間に――

「八華彼岸・曼珠沙華！」

障壁を八方向へ展開し、その中心を斬り裂く。そして最後に八つの障壁で叩き潰す。これがこの技の極意。

ギルフォードはまともにこの技を受け、その直後にペンダントが砕けた。

「フム、弱過ぎるね」

僕はそう言い武器を納めようとする。しかしその直後、硝子が割れる音が響く。

障壁が砕かれた！

僕はそう思い、後ろを向く。するとそこには――

「歎……お前か」

狂咲歎の姿が有った。

「あれれ？　ボクはあの七光を追ってきたはずだけど、だけでも、だっただけ………何故に何故、何でかな？　カオルが居るのは……」

血まみれの姿で、手には一つの鎚。恐らく、人を殴った後なのだろう。鎚も血まみれだ。

「歎い……！　待ってよ……！」

僕が歎と会話をしていると、後ろから歎のメンバーと思われる五

人が姿を現す。その中にはリリナの姿もあった。

「あれ、カオルじゃない。何で此处に？」

「…………それはこっちのセリフで良いかい？」

僕は傍から見れば異様ともとれる血まみれの歎、リリナ、そして他のFクラスメンバーを見てそう言った。全員が血まみれなのだ。

「こいつだれネ？ 二人の知り合いか？」

一人の黒衣の男と思われる奴が僕に着いて聞いて来る。

「ええ、カオルは私達の幼なじみよ。ちなみにS P E C I A Lね」

リリナがそう言うのと、歎とリリナ以外の全員が身構えた。

「…………僕と戦うのかい？」

「うーん、現状を見ればそうだね、そうだよ、そうだとも。けれど、ボク達が知っているのに、君には何の情報もないってのは些かボクの美徳に反するからね。ボクら以外の紹介を軽くするよ」

そう言っただけは四人の横に立つ。

「右から王 わん 黒竜 へんろん。武術の使い手。次にエミリー・ウィップル。槍の使い手。次にサーシャ・プロテイト。弓の使い手。最後に獄神焰。銃の使い手さ」

全員の紹介が終わり、歎が此方に向く。そして敵意を向けて来た。

「カオルとは戦いたくないけど……これも訓練だから……行くよ、行こうか、行きますよ！」

歎の声と共に、動き出すFクラス。最初に歎の攻撃。結果を先に出し、原因を後で行うチートだ。

「ボク達Fクラスだって魔武器は召喚出来たんだよ。ほら、この通り！」

そう言っただけは持っている鎚で僕の頭を叩いたと言う結果を出す。しかし、僕の障壁がそれを許さない。

「カオルの魔法は絶対拒絶型！でも、数で押せばどうってことないの！」

リリナが人形遣いの能力の応用で、鋼系を使う。僕はそれを障壁で防ぐも、辺りの木に絡まって行き、間接的に僕を拘束した。

「しまった！？」

僕がそう言った瞬間、展開している障壁の一部を破壊される。

「残念だたネ。オレの能力、魔穿鉄拳ませんてつけんは魔法を破壊する能力だヨ」

そう言われた直後、僕の障壁は全て砕け散った。すると鋼系で完全に拘束され、四肢を撃ち抜かれる撃ち抜かれる。

「……ッ！？」

「俺様の能力は見敵必殺（サーチ&デストロイ）。狙ったら最後、確実に当たる弾を撃つ事が出来る」

倒れそうになるのを、拘束が許さない。そして次に、腹部を槍が貫通する。四肢に銀色の巨大な針が刺さる。

「串刺好^{くわしじょう}。相手を串刺しにする妾の能力。いかがです？」

激痛の余り、声を出す事が出来ない。そして最後に、両肩に矢が刺さる。そして、体内に激痛が走る。

「ガ…ア…」

「ごめんなさい！ でもこれが私の能力、亡飲亡喰^{むつぐみむつき}なんです！」

そう言い頭を下げる敵。そして最後に歎が近付いて来る。

「うーん、ここまでやると見てられない位無残だね。でも、君の不死性は異常とも呼べる、呼べるし、呼べるから……徹底的に殺らせてもらっ、もらっよ、もらいます」

そう言っ頭を鎚で殴ってくる歎。しかし、感覚がマヒしてきたのか、痛みをそこまで感じない。何度も、何度も殴られるが、痛みを感じる事がない。

「嘘でしょ……、あれだけ頭を殴られているのに……まだペンダントが割れないだなんて……」

一人が驚きの声を漏らす。

「それが、カオルの怖い所。どんなにボロボロになっても立ち上がるあの不死身の肉体。アタシ達が恐れているカオルの一面なの」

リリナがそう言う。歎は僕を殴り続ける。

「クッ、まだペンダントが割れないなんて……ヤッパリカオルは凄い、凄いな、凄過ぎる」

そう言いながらも殴り続ける歎。

「…………リリナ、拘束を解いて」

歎がそう言う。

「え、良いの？」

「うん、構わないよ。カオルには……本気で死んでもらうから……」

歎の雰囲気が変わる。

「さてと……歎、君の負けだ」

リリナの拘束が解かれた瞬間、カオルは空中高く投げ飛ばされる。そして、落ちてくるであろう場所に、歎は短剣を向けた。

しかし僕は空中で耐性を整え、障壁を展開する。そして歎の短剣を砕き、攻撃を開始する。

「言っておくけど、僕がこの絶対拒絶型の魔法使いだって分かったのは最近だ……僕はそれまで魔力が多いけど魔法が使えないと言う事で、蔑まれ、虐められ、何度も暴力を受けて来た。そのせいか、

多少性格が歪んでいるんだよね…」

そう言いながら、歎の膀胱が有るであろう部分を本気で蹴り飛ばす。

「!?!? ウウ……アア……!?!」

膀胱は神経の束が存在する。そのため、人体の急所としても有名だ。少し刺されただけでも激痛で動けなくなる程。蹴りとは言え本気で遣ったため、痛いだろう。

「歎!?! ヤッパリ昔から不死身なのね、カオルは!」

リリナがそう言い、もう一度拘束をしようとするが、同じ手は二度喰らわない。

僕はそう思い、リリナに近づきこめかみを軽く殴る。その瞬間に、リリナは意識を失いその場に倒れた。

「さあ、次だ…。僕は自分で体験している分、人体の急所には詳しくと自負しているんだ。さあ次は誰かな?」

激痛でのたうつ歎、意識を失い倒れているリリナ。しかもそれが、瀕死の重傷を負っている人間にやられたのだから、異常ともいえる。そのせいでFクラスのメンバーは迂闊に動けない。

「来ないのか? なら、僕が行く事にしよう」

一人は喉、一人は鳩尾、一人は顎、一人は肺と、急所を確実に攻撃していく。どんなに鍛えていたとしても、所詮は学生レベル。急所を攻撃されればひとたまりもない。

「…クッ」

このまま止めを刺したいが、身体が悲鳴を上げている。この場に
いる全員に止めを刺すことは可能だろうが、刺し終わると同時に、
僕自身が倒れるなんてのは嫌だ。だから僕はいったんこの場から離
れ拠点に戻る事にした。

その後拠点に戻った僕は、ミリアに治療を受けた。そして何故か
平然としているシンに対し、怒りを覚え一発殴った事を伝えておこ
う。

サバイバル 〓 四日目・五日目 〓 (前書き)

元々ない文才が、更に酷く…。

サバイバル ～四日目・五日目～

1

Fクラスのメンバーとの戦いから一日。ミリアの治癒魔法により、傷も体力も完全に回復した。そして、Fクラスの情報も得た。

「ふむ、食料には些か問題はないみたいだね。残りは此処に籠って
いれば、負けることはないけど」

ポイントも今のところ一位。このまま此処に隠れておけば、サバイバルが終わるまではやり過ごす事が出来る。しかし、ポイントがこのまま下がないとも限らない。更に言えば、Fクラスの動きも気になる。

「で、どうする皆？ 討つて出るか籠城か」

ボクは全員に尋ねる。

「俺は討つて出たいな。カオルが昨日あんなにボロボロになっていたんだ。そんな強い奴と戦いたい」

シンはFクラスと戦いを所望する。

確かに人数的な問題はこれで解決できるが……如何せん、Fクラスの持つ特殊能力が厄介すぎる。僕の魔法障壁なんて通用しないし……。

「でも……カオルが……ボロボロになってた。……勝てる？」

レナがそう言う。すると全員が黙る。確かに六対一だった、前に五対一で僕に敗退している皆は、力の差が有ると言う事が分かっている。

しかし、僕が戦ったため敵の情報は少なからず持っている。

「とりあえず、今回得た情報を伝えておく。」

まずはリーダーと見られる歎。能力名は出オチ。因果と結果を逆転させる能力。対処法は動き回っておく事。例え結果を先に出せても、その結果が避けると言う結果ならば問題ない。

次にリリナ。能力名は人形遣い。対象の人物を拘束、もしくは操る事が出来る。対処法は糸の切除、もしくは障壁で糸を近付けない事。どんなに操る事ができたとしても、糸が当たらなければ意味がない。

次に王黒竜と言うやつ。能力名は魔穿鉄拳。魔法を破壊する事が出来る。更に武術の使い手。対処法は魔法が破壊されると同時に、物理攻撃を仕掛ける事。だから攻撃で圧倒するしかない。

次に獄神焰と言うやつ。能力名は見敵必殺。遠距離系統の武器を確実に当てる事が出来る。対処法は障壁による防御、もしくは相手の攻撃を弾く事。絶対に当たると分かっているので、対処は出来ない事もない。

次にエミリー・ウィップルと言うやつ。能力名は串刺好。攻撃に当たった対象を串刺しにする事が出来る。対処法は攻撃に当たらない

い事。使い武器が槍なので、中距離からの攻撃にも気をつけなければならぬ。

最後にサーシャ・プロテイト。能力名は亡飲亡喰。攻撃した者を中から破壊する事が出来る。対処法は攻撃に当たらない事。弓矢が武器なので、遠距離からの攻撃に気をつけなければならない。

まあ、こんなところかな？ で、感想はある？」

僕はそう言い、皆の方を見る。

「うーん、何と云うか、厄介な奴らばかりだな。でも、俺はその王黒竜とか言っやつと戦ってみたいな」

「うちはリリナがええな。拘束する暇もなく魔法で圧倒するで！」

「レナは……獄神焰が……いい。……銃なら……負けない」

「私はエミリー・ウィップルってやつが良いわね。槍なら負けはないわ」

「必然的に私はサーシャ・プロテイトさんですか。でも、弓の腕なら私だって負けません！」

何故かやる気になっている。いや、まあ別に良いんだけど。

「この状況だと、僕は必然的に歎とか。まあ、頭をさんざん殴ってくれたから、お返しするか」

皆に流され戦う事を決める僕。籠城作戦と言う事で、此処に籠り

っぱなしと言つのは流石に嫌だしね。

「じゃあ討つて出ると言つ事で良い？」

僕の言葉に全員が頷いた。ならばそれなりに準備をしなければならぬ。

「……さて、今日、明日は此処にしよう。僕は少し用意をしなければならぬからね」

僕はそう言い皆が了解してくれるのを見て、洞窟の奥へと行こうとする。

「どこ行くんや？」

「ああ、ちよつと集中したいから洞窟の奥の方にね。今日、明日で習得したい者が有るんだ」

僕はそう言い、洞窟の奥へと足を運んだ。

第二の魔王刀を解放しなければ……。やり方は分からないけど。

「さて、どうしたモノか」

十二魔王刀（懐中時計状態）を見ながら考える。

第二の魔王……。恐らくはかなりの力になってくれるだろう。しかし、解放しなければ意味がない。

僕はその日一日、懐中時計と睨めっこの状態で過ごした。

サバイバル五日目。僕は依然第二の魔王を解放できていない。
どうするか。考えれることは全てやったし…。

「……………うゝむ…」

考え続ける。

！　そう言えば、こいつを召喚する時に別の空間に移したよな？　もう一度あの空間に行けば何かヒントが…。

僕はそう思い、召喚する時の方法を試してみる。指を斬り、懐中時計に一滴血を垂らす。すると案の定、一面真っ黒な空間まで飛ばされた。

「何かヒントが有るはずだ」

僕はそう思い辺りを散策する。すると、寅の字が中に浮かんでいるのを見つけた。

「……………汝、力を持つ者か？」

寅の字から声が響く。その声に僕は頷く。

「ほう、汝は力を持つ者か。それは面白い。誠に面白い」

寅の字から楽しそうな声が響く。

何だこれは？　もしかして認めてくれているのか？

僕の中でそんな疑問が浮かんでくる。

「我は第二の魔王。“絶王・缺”。全てを絶ち斬る魔王なり」

寅の字はそう言うと、巨大な剣の形に変わる。するとその瞬間、絶王・鋏は斬りかかってきた！

僕は辛うじて斬王・紙を召喚し、攻撃を防ぐ。しかし――

「な！？」

反対側の刃が回転して、鋏の形になり逆側からの攻撃が来る。

「我は絶王・鋏。全てを絶つ！ 首、胴体、足、命、そのどれをも絶ち殺す！」

また辛うじて頭を下げ、攻撃を避ける。

「クツ、これが第二の魔王の力か！」

鋏を合わせる時の独特な音が辺りに響く。

「力が有るものだ？ 汝がか？ 笑わせるな！」

その瞬間に、左腕が絶たれる。

「！？ グ…ガア…！？」

痛みで筋肉が硬直し、叫ぶことすらできない。

「次は足だ！」

すると右足が絶たれる。

「さあ、地面に這いつくばり、首を我に出せ！ その首を絶ち斬つてやる！」

その言葉を聞き、僕は手に持つ紙で、支えを作る。絶対にこいつには這いつくばらないと言う意志をこめて。

「ほう。しかしその状態では、攻撃など出来まい」

そう言い、鉄独特の音を響かせながら、近づいて来る絶王。もう少し、もう少しで僕の首に刃が掛けられる。

「では、死ぬが良い」

そう言い、絶王が僕の首に刃をかけた。しかし、その瞬間を僕は待っていた！

「勝つのは僕だ！」

僕は支えにしていた紙を引きぬき、倒れる体で絶王に斬りかかった。

「貴様では我を斬れん！」

絶王がそう言い、僕の首を絶とうとする。しかし――

「フッ、何が斬れないだ……」

「何！？」

見事に真つ二つになった絶王。

「斬王・紙。斬る王と書いて斬王。その能力を忘れたわけじゃないだろ？」

そう尋ねるも、絶王は口を開かない。否、開けない。何故なら斬られてしまったから。

斬王・紙の能力。一定量の魔力を込めると、込めた後一度だけ絶対切断の能力を得る。斬王・紙の唯一絶対的な能力。完全なる一撃必殺。それがこの、斬王・紙の力。

「魔王か…絶王か…知らないが…僕を、過小評価しすぎだ。……力なき魔王が！」

僕はそう言うと共に、意識を失った。

僕の手にある懐中時計の寅の部分は白色になっていた。

サバイバル ～六日目～

1

サバイバルが始まって六日目。僕達はずいに動き出した。獄神焰ではないが、見敵必殺（サーチ&デストロイ）と言う感じで、出会ったチームを倒しては進み、倒しては進みを繰り返す。

「み、皆。そんなに飛ばして大丈夫なのかい？ 特にレナ、アリア、ミリア」

僕がそう問うと、三人は元気良く頷く。

「カオル……傷つけた。……生きて……返さない……」

ファートウムを舐めながらレナは艶美に笑う。

「ま、まあ、私はじつとしているのが翔に合わないって言うか……とにかく、カオルを傷つけた奴を限界まで甚振って惨殺したいなんて考えてないんだから！」

顔を真っ赤にして言った言葉がそれ。

「カオル君を傷つけたんだよ？ そんな奴ら眠らせて、頭を割って、直接頭の中を掻き回してあげないといけません。大丈夫、カオル君は見てくれるだけで良いですから」

目が笑っていない…。そして言っている発言が危なすぎる…。

「まあ、穩便に——」

「馬鹿は喋るな!」「シンは黙ってて!」「シン君も掻き回しますよ?」

「——ヒイ!?!」

シンが脅える。それもその筈、三人ともシンに武器を突きつけているからだ。しかも、目が逝ってる。

「今のはシンがあかん。でも、レナもアリアもミリアもほどほどにしーや。一応カオルのつれやから。シンもそこで脅えてんというシヤキツといい。これが終わったら…」

カナがそう言いシンに喝を入れる。そしてシンの耳元で何かを呟いた。その瞬間、シンのやる気が一気に上がる。

「いよつしゃあああああ!!! サバイバル訓練なんて、今日で終わらせてやるぞおお!! 目標は今日中に他のチームを全滅させる事!」

そんな事を言いながら走り出すシン。

いや、確かにサバイバル訓練は残り一チームになったら、その時点で終わりだけど…。そんな都合の良いようにはいかないだろう。

ちなみに、今のランキングは一位Sクラス(百四十ポイント)、二位Fクラス第一チーム(九十ポイント)、三位Aクラス第四チーム(六〇ポイント)。そして、現在残っているチーム数は上記の三チームプラスの四チーム。最初、四十五チーム。それが今では七チームまで激減した。

「まああんなシンは無視して……恐らく歎の性格上、今日は現れないと思うんだ」

「何で？」

「歎は劇場型犯罪者とも言うのかな？ 事をしでかす時はあたかも劇の一部の如く披露するんだ。そして歎が一番好きな場面は終了直前。つまり、最終日に大きく討って出ようと言う訳さ。勿論、僕達を倒したら勝てるポイントを維持しながら」

僕が此処まで言うつと放送が流れる。

『Bクラス、第三チーム全滅。Fクラス第一チームの合計ポイントが百となります』

やはりね。だから僕達も――

「負けてられないだろ？」

八華百合・鬼！

紙を取り出し、一つの太い木を目掛けて技を放つ。木は見事に斬られ、四人の男女が落ちてくる。二人は木の枝と一緒にペンダントが砕けてリタイアしたようだ。

「高度な透過魔法だね。初めてみたよ。でも、気配を消さなければ意味がない。気配を薄めるんじゃないくて、消さなきゃね。

八華百合・鉄砲！

無数の斬撃が四人を襲う。四人はあつと言う間にペンダントが砕

かれ、リタイアとなる。

『Cクラス、第五チーム全滅。Sクラスの合計ポイントが百五十となります。ここで、Cクラス全チームの全滅が確定しました』

放送が流れ、残り五チームとな――

『Bクラス、第一チーム全滅。Aクラス第四チームの合計ポイントが七十となります。ここで、Bクラス全チームの全滅が確定しました』

――訂正しよう。残りは四チームとなった。残りは僕達Sクラス、そして歎達のFクラス第一チーム、Aクラスの第四チーム。後全滅していないクラスは……、おお、意外や意外Eクラスの第六チームだ。しかしEクラス第六チームのポイントは〇。優勝するには他のチームが引き分けて全員リタイアとならなければならぬので不可能。恐らくサバイバルを最後まで行き残ろうと隠れているのだろう。それはとてもいい判断だ。

「でも、それでは逃げ場がない」

「ん？ いきなりどうした？」

「え、ああいや。Eクラスも恐らくリタイアになるだろうと思ってね」

「何でそんな事がわかるんですか？」

ミリアが訪ねてくる。

首を傾げている動作はともかわいらしいな……、じゃなくて。

「どんなに頑張っても、サバイバルの知識が初心者並みの一般生徒

だ。恐らく食糧にも限界がすぐに来るだろう。僕の場合は取つてきた食料を保存のきくように調理したりしたから問題ないけど。でもそんな知識は経験者か、よつぼどのマニアか、事前に途轍もない勉強をした奴位だ。その証拠に毒キノコや毒魚等を食べてリタイアになった哀れな連中もいるだろう？」

そのせいで、サバイバル初日で消えた班もある。そういう班だけで恐らく五班は減っているだろう。

「だから、今日は敵に合う事がないと思う……………ごめん、訂正する。この戦いが終わったらかな？

八華百合・鉄砲！」

僕は何もないはずの場所目掛けて、技を放つ。

「完全透過魔法。さっき見た魔法の、更に高度なものだね。流石はAクラス」

僕がそう言い紙を構える。其処には、六人の男女が立っていた。

2

「良く分かったな……」

リーダーと思われる男が口を開く。僕を含め、全員が武器を構え戦闘態勢を取る。

「姿は隠せても、気配が回りと同化していない。それなら簡単に居

場所が分かる。気配を同化すると言つのは、こつやるのさ」

フツと僕は肩の力を抜き、気配を回りと同化させる。

「！？ 消え——」

「残念。君が見えていないだけさ」

ドツと言つ音と共に、リーダーらしき男の右胸から突き出る、銀色の刃。

「ガア……」

男が痛みに呻く。

「なっ！？ 卑怯だぞ貴様！」

一人の女性が戟を構えて、そう怒鳴る。

「卑怯？ 何を言っているんだい？ もう戦いは始まっている。僕は情けをかけて、わざと左じゃなくて右に刺したのさ。気配の同化のしかたを教えた授業料としてね」

僕の言葉で顔をゆがめる女性。

「せやな。今のはカオルじゃのうて、あんた等が悪い。戦いで気い抜いたあんた等が。せやろ、エマ」

「カナ！ お前には騎士としての誇りはないのか！」

「無いな。うち等、ナイトオブマシヤン一撃必殺はあんた等、ナイトオブナイト正騎士とはちゃうねん。

誇りじゃなく結果や。あんた等みたいな騎士の誇りっちゅうもんは持ち合わせてへんねん！」

正論だな。誇りが有るからといって結果が残る訳じゃない。最優先事項は結果を残す事。誇りなんて物で結果を出せないだなんて、言い訳にもならない。

「さて、始めようか。御託はいらない。生きるか死ぬか。その二つだ。武器を取った時点で、それは決められるのさ。卑怯もクソも関係ないね」

少し気取り過ぎただろうか？ まあそれは良いだろう。

「き、貴様——」

「止めるエマ！ その男が正論だ。武器を取った時点で、死ぬ覚悟がなければいけない。それが、騎士と言うものだ！」

僕に胸を貫かれた男が立ちあがり、女性の言葉を遮り、そう一言。

「はあ…、エマだけやのうて、あんた等全員十二騎士団所属かいな…」

全員の顔を見まわしたカナが、溜め息をつきながらそう一言言う。

「しかも“歩く槍騎兵”が居るし」

「歩く槍騎兵？ 何よそれ？」

シンの呟きに、アリアが反応する。それもその筈。槍騎兵とは馬に乗り、ランスを装備した兵の事を言う。歩く槍騎兵とは矛盾して

いるのだ。歩く兵は歩兵、しかしそれでは馬に乗っていない。逆に馬に乗っていたら騎兵、しかしそれでは歩いていない。

「良い感じに混乱しているようだな。まあ、その真意を見せてやる！
闇天駆けるは死の黒馬

黒き身体は命を飲み込み、その足は全てを砕くだろう！
闇属性最上級魔法<闇夜の影馬>」

男の魔法が発動し、影から黒い馬が現れる。男はそれに跨ると、ランスを向けて突撃してきた。

「!?!? そう言う事か!」

僕は急いで回避し、皆の方を見る。敵は皆に一人ずつ付いているようだ。一対一がご所望のようだな。

「初見で完全回避されたのは、久しぶりだぞ!」

男はランスを向け、楽しそうに笑う。

「そうかい? 今のは遅すぎると思うけど」

「ククツ、面白いなお前。まあ、お前達も運がないな。いくらスクラスとはいえ、一対一だとキツイだろ? カナやシンは騎士団所属だが、他は能力が高いだけの素人。一対一になった時点で、勝ち目はないよ」

男が笑いながらそう言う。その時、僕にはハッキリと、何かが切れる音が聞こえていた。ゆっくりと後ろを向いていると、尋常じゃない位どす黒いオーラを出している三人が居る。特に、レナはあり

得ない位怖い。

「レナが……勝てない……。…（ニヤリ）」

レナは手に持つファートウムをガトリング砲に形を変える。そうとうイラついたのだろうか、相手が構える前から引き金を引いたようだ。

「アハ……アハハ………誰が勝てないって！！！」

……最近思うのだが、レナのキャラが壊れて来たような気がするのは僕だけですか？ 余りにも容赦のない攻撃に、相手さん涙目になってるし……。僕と対峙する男も、レナの攻撃に動きを止め、冷や汗を掻いてるし。

「……すまない、前言撤回しよう。君達は異常だ……」

男はそう言うと、再び魔法を発動する。

「しかし、勝つのは我々だ！ ハッ！」

そう言い突撃を開始する男。しかし、初見でなければどう来るかが分かるので、的確に対処は出来る。

僕は男の突撃をかわし、そのまま反撃に移る。

「八華百合・鉄砲！」

しかし相手も慣れているせいか、僕の技を簡単にかわす。

「流石、Sクラスと言ったところだな！ やはり能力はずば抜けて

いる。しかし、経験が足りない！

闇天駆けるは死の天馬！

黒き翼は日の光を奪い、その足は命を砕くだろう！

闇属性大魔法<地獄の天馬>」

大魔法だと！？ しかも一人で大魔法を使うなんて……規格外はお前も同じじゃないか！

男の魔法が発動すると同時に、黒い身体に黒い翼を持った馬が現れる。大魔法は本来、三人以上の人間が、互いの魔力を供給しあい使う魔法である。一人で行う事が出来ないと言う訳ではないが、多量の魔力と気力を発動時に奪われるので、基本的に一人で使う事がない。しかし、十二騎士団のカナの所属する部隊は例外である。

「さあ、さっきのはデモンストレーションだ。此処からが本番と言うものだ」

その瞬間、先程とは比べ物にならない位の速度で、攻撃をする男。回避できない事はないが、かなりギリギリになってしまった。僕は咄嗟に、障壁を十枚展開し、防御に入る。

硝子の割れる音が響くが、僕まで攻撃が届かず、男は一端距離を取る。

「ふむ、それが噂の絶対防御と言う物か」

「……ええ。生憎、僕にはこれしか取り柄がなくてね」

割られた分を元に戻し、更に五枚障壁を追加展開する。一回の攻撃に付き、一、二枚のペースで割られていく。確かに、割られた瞬間に障壁を展開し直せばいいのだが、それではギリ貧だ。距離を取り、構えを治す男。

「さて、こいつは防げるかな？ 絶対防御よ」

そう言い、槍を構える男。雰囲気が変わった。
何か嫌な予感がする。何をする気なんだこの男は…

「いくぞ、絶対防御！

ベレロボン
天馬翔英雄！！」

「……ッ！？！？」

肩からくる激しい痛みが全身を駆け巡る。遅れて聞こえてくる、割れたガラスの音。まるで因果と結果を逆転させ攻撃をしたかと思わせるほどの速度。一瞬にして割られた十五枚の障壁。

クッ、絶対防御が聞いてあきれる！ だが、タダでは終わらないぞ！

僕は男の上に、強化した障壁を展開し――

「潰……れる……！」

――男目掛けて落とした。

絶対拒絶型の持つ、拒絶属性。その属性が、攻撃に特化していると書かれている部分は此処にある。対物理障壁を使い、相手を叩き潰す事が出来る。対魔法障壁を使い、身体強化魔法等を無効化する事が出来る。自らの武器に障壁を纏わせ、相手に攻撃した瞬間、その障壁を完全展開する事で、相手を吹き飛ばす事が出来る。それこそが、絶対拒絶型の神髄とも言える攻撃。

相手との距離に関係なく、自由自在に障壁を展開させ、自由自在にその障壁を操る事が出来るのが、絶対拒絶型。

痛みは激しいが、立てない程でもない。僕は立って男の方を見る。

「ク………アア……。い、今のは効いたぞ………」

左腕が潰れている男。直撃は免れたらしい。

「まだ、終わらないぞ!」

男の周りに障壁を展開し、押し潰す。しかし、男はそれをギリギリで回避し、攻撃をする。

「天馬翔英雄!」

障壁を二十枚展開し、回避をする。二十枚展開した内の十七枚を破壊される。

「これほどの障壁をノータイムで二十枚展開とは、流石だな」

「良く言うよ。それを紙の様に貫いて来るくせに」

「フッ、やはり面白い……戦いは……」

男はそう言いランスを構える。

「でも、これで終わりにしよう」

そう言い、男は再びあの技を放つ。

「天馬翔英雄!」

高速で、そして障壁を物ともせず貫いて来る攻撃。しかし、何度
も同じ攻撃に屈する僕では無い。
そう思い、とある障壁を展開する。

「ッ！？ 何だと！？」

鐘を撞いたような鈍い音が、辺りに響く。
超密度多重障壁。その名の通り、かなり密度の高い障壁を、一枚の障壁の様に扱う魔法。

「残念だったね。君の力は、僕に届かなかったみたいだ！」

そう言い、僕は男目掛け紙を振るった。その瞬間、男のペンダントが砕け、強制転移が発動した。

「クッ……予想以上に消耗したな……」

その場に片膝をつき、肩を押さえる。肩からは血が流れ出ており、今も徐々に身体から出ている。流石に、此処まで来て出血多量なんて洒落にならない。

「皆は……」

そう思い辺りを見まわす。其処には、一方的に相手をリンチしているレナ。圧倒的な力で敵をねじ伏せているカナ。互角に戦っているシン。若干おされぎみのアリア。相手と一定の距離を保ちながら善戦しているミリア。

あ、レナの相手のペンダントが砕けた。しかし、レナは止まらない。

「ファートウム………荷電粒子砲………準備」

ファートウムの形が変わり、双銃が一挺の巨大なライフルに変わる。

「皆……死ね……」

凄まじい位の光と爆音が辺りを包み込む。そして、その場にいた全員が、動きを止め冷や汗をかく。

「……クスッ」

怖い……。絶対にレナを怒らせてはいけない。特に、勝てないとか、弱い禁句みたいだ。

「とりあえず……もう……一回……最大出力で……撃つ……」

再び激しい光が銃口から放たれ、凄まじい爆音が辺りを包んだ。最大出力と言っていただけはある、辺りは衝撃波で砂煙が立ち上り、周りを確認できない状況になっていた。

何とか、レナが攻撃をする前に、全員を回収し超密度多重障壁を五枚展開したのだが、その内の三枚を持っていかれている。

砂煙が晴れる。当然敵は全員強制転移された様だ。それより問題なのが、レナが立っている場所から約三百メートル先まで、地面が抉れて、存在していた木等が全て消え去っていると言う事だ。

この時、僕は、イヤ僕達は誓った。レナを絶対に怒らせないと言う事を。

「うん……スッキリ………した」

物凄い良い笑顔で、レナはそう呟いていたのを、僕は苦笑しながら聞いていた。

サバイバル 〓六日目〓（後書き）

この更新後、申し訳御座いませんが、暫く更新する事ができません。理由としましては、自分の通っている学校のテスト期間に突入したからです。

こんな駄文でも、読んでいただいている皆様には申し訳ありませんが、このテストでヘマすると、就職や進学にも関わってきますので、ご了承くださいただたら幸いです。

サバイバル 〜最終日〜（前書き）

夏休みに入っても毎日学校で、久々の休日に久々の投稿。
クオリティは今までで一番低い様な気が……。本当に申し訳御座
いません…。

サバイバル 〜最終日〜

1

今日でサバイバルが終わる。やっとだ。長かったこの一週間。しかし、この日に、この日にある事件が起きた。

それが、近くの魔族研究所から、魔族が逃げ出したと言う事件だ。逃げ出した魔族はキマイラ。魔族内での討伐ランクは低いモノの、学生で相手に出来るような優しい化物じゃない。

「と言う訳で、サバイバルは中止だ」

「……今さら？」

「ああ、今さら」

久しぶりに出てきたシンヤがそう言った。

僕はFクラスと決着を付けたかったのだが。

「ちなみに、第一位から第三位までクラインド杯に出られるから、決着を付けたいと考えているなら、クラインド杯でやってくれよ」

そう、シンヤが言った。周りには僕とシンヤ以外誰もいない。僕以外は全員転移して学園に送られたのだ。さて、ならばなぜ僕が此処に残っているのか。それはいたって簡単。

「こんなふうに話していても良いんだけど、一回の攻撃で一〜二枚の障壁を破壊されていつてるんだよ」

「ああ、みたいだな」

そう、周りには僕たち以外に生徒はいない。しかし、僕が張った障壁の外には、巨大な魔族、キマイラがいるのだ。

「さて、どうするか？」

「いや、教師である君が決めるべきだろ？」

「そうなんだけど……。ぶっちゃけ面倒だし」

教師の言葉かそれが。生徒が一人残っているんだぞ？ いや別に、キマイラの攻撃が防げないわけではないのだが……。

まあ良い。とりあえず、面倒になってきたから、潰すか。

「あいつは殺しても良いのかな？」

「ん？ ああ構わないぞ」

シンヤがそう言うのと同時に、僕は手を振り下ろして、キマイラの足を潰した。

「ギイヤーアアアアア！！？！？！？」

甲高い叫び声を上げるキマイラ。

「全く、五月蠅いよ。化物の分際で」

そう言つと僕は全ての足を潰し、動きを止める。

「ウワア、お前容赦ないな」

「ん？ そうかな？」

「いや、まがいなりにも人の顔が浮き出ていた部分を躊躇なく潰すなんて」

キマイラは一種の幻覚作用を起こす臭いを発しているらしい。その臭いを嗅いだものには、キマイラが同族の生物に見えたり、また一部が同族の生物に見えて、殺し辛いそうだ。しかし幻覚と分かっているので、別に躊躇する事では無い。

「別に良いんじゃないか？ それにこのまま動かれて、本当に人間を取り込まれた方がやり辛い」

キマイラの能力の一つに、喰収と言う物が有る。これは、食った物を自らの体の一部に取り込み、殺さずに生かしておくと言うものだ。これはかなり気持ちが悪く、また同族が取り込まれていると、本当に躊躇してしまう。その躊躇した瞬間に、喰い取り込まれると言つ訳だ。

「さてと……… サバイバルを中止にしてくれた恨み、晴らさせてもらつとしよう！」

僕はそう言い、総攻撃を開始した。

「ギ……ギギ……」

見るも無残な位に潰れたキマイラ。正直気持ちが悪い。キマイラの幻覚作用で、潰れているのが人間の様に見えるのだ。

「ウエ……、もういい加減に殺して良いんじゃないか？」

「……だね。これ以上は気持ちが悪くて見ててられないからね」

僕はそう言いキマイラの顔めがけ、紙を振り下ろした。

「……最後の最後まで気持ち悪い奴だね。切り落とした部分が、人の頭に見えるよ」

「ああ……確かに。でも、暫くしたら消えるだろう」

シンヤは顔が真っ青になっている。恐らく僕も同じなのだろう。幻覚と言えども、人間の形をした物を殺したのだから。

ああ、暫くお肉は食べれなそうだな。最悪だよ。こないだ商店街の福引で、三等の国産最高級牛肉を手に入れたのに。まあ腐らないよう魔法保存してあるんだけど。

「じゃあ帰るぞ。キマイラはほつといて良いそうだ」

「そう。ならよろしく」

そう言つとシンヤは、僕の肩に手を当てて転移を発動した。

転移で僕は学校に帰ってきた。サバイバルの閉会式は始まっており、順位が発表されていた。

「えゝまず三位はAクラスの第四チームです！」

パチパチパチと拍手が送られ、リーダーに賞状と盾（小）が贈られる。

「第三位のAクラス第四チームには、学食一年間無料券が与えられます！」

すると横から出てきた教師から封筒を渡される。そして壇上から降りて行き、壇上の前にある表彰台に上がった。

「続いて二位は……何とFクラスの第一チームです！」

その言葉に会場がどよめく。歎はそんな中、笑顔で壇上に上がっていく。そして同じように賞状と盾（大）が贈られる。

「第二位のFクラス第一チームには、学食四年間無料券が与えられます！」

第三位と第二位の差。これ考えた奴は誰だよ。差が激し過ぎるだろ。

「では、第一位の発表です！」

その放送の瞬間、会場にいた殆どの人が、どうせSクラスだろ的な事を言っていた。確かにそうだから仕方がないのだが。

「一位はSクラスです！ おめでとうございます！」

あれ、壇上には誰が上がるんだ？ あ、シンが行った。

シンは賞状とトロフィーを受け取った。

「第一位のSクラスには、学園内全お食事処三年間無料券が与えられます！」

だから考えた奴は誰だよ！ 学食と学園内全お食事処の無料券って！ いくらなんでもやり過ぎだろ！ しかもシンが居るんだぞ！ 泣くよ、絶対に食べに行ったお店の店主が泣くよ！

「ちなみに、学食や全お食事処には前もって五千万リートを支払っておりますのでご安心ください」

？
どっからそんな金が！？ 学食も含めたら数が五十は超えるよ！

「お金は学園長が自腹で払ってくれたのでご安心を」

学園長凄い！ どんな大金持ちだよおい！ ん？ 学園長なんか泣いてない？

「うう……… 儂の一等だったリベルビツク宝くじが……… 儂の五十億リートが」

「ただけキャリーオーバーしてるんだよ！ あ、そう言えばリベルビックって言えば一等が七億リートだったな。いや、それでもキャリーオーバーし過ぎだろ。」

「ご愁傷様、学園長」

「お前なに言ってたんだ？」

隣にいたシンヤがそう言ったので、僕は学園長の方を指差した。学園長を見たシンヤは、僕と同じ事を察したようで、手を合わせてご愁傷様と言っていた。

「良いもん良いもん！ 三億リート残ったもん！ あでも、家のローンで殆ど消えて、実質残るのは三千万リートじゃん。あ、そう言えばこないだ妻が新車買ったな。はあ…、考えれば考える程、減っていくなあ…」

ドンマイとしか言えないですね。いや、そのお蔭で僕達は無料券を貰えるんだけど。

「では、今回のサバイバルはこれにて終了です！ 明日から三日間の休日で、疲れを十分に取ってくださいね！」

そう言い壇上から降りて行く教師。そして一斉に動き出す生徒達。恐らく寮に帰るのだろう。

「おーい！ カオル〜！」

「ん？ ああシンか。どうしたんだい？」

「いや、どうしたんだ言って……。ほらこれ、優勝賞品の食券」

そう言ってシンは一枚のカードを投げる。

へえ、これがねえ。僕はカードを見た後、生徒手帳に挟みこんだ。

「で、他に何か用は？　僕は帰って寝たいんだけど」

「なに言ってるんだ！　今から食券を使って打ち上げに決まってるこのボケガアアアア！……」

「五月蠅いよ！　拳のおまけも付けたるよ！」

僕はそう言いシンを殴りつけた。

「……………痛い。まあいいや！　とりあえず、お前も付いて来いこの野郎！」

僕はシンに手を引っ張られ、焼肉屋に連れて行かれた。

さつき肉を暫く食べれなくなるような体験をした僕に、喧嘩を売っているのかと思ったが、皆と笑いながら食事をしたため、楽しむ事ができた。

「で、何でお前は肉食わないんだ？」

「……………」

僕はトウモロコシやキャベツ等の野菜しか食べなかったが。

クラインド杯校内選考（前書き）

クオリティが上がらない。どんどん下がって…orz

クラインド杯校内選考

1

サバイバルが終わって一ヶ月。今日からクラインド杯の校内トーナメントが行われる。一年から四年までの学年代表クラスを三クラスずつ出場させ、その上位二チームを一チームとし、クラインド杯本戦に出場させるのが決まりだ。

ちなみに何故二チームなのかと言うと、一チーム六人×二と言う事で十二人。十二騎士団と関連させているらしい。僕にはイマイチ意味が分からないが。何故かと言うと、一チーム十二人だが、試合に出る事が出来るのは十二人の中から五人まで。最初から五人にしろと思うのは僕だけだろうか？

まあ理由として相手のタイプや魔法の属性を見て誰を出すかとか、疲労が溜まらないようにするとかあるらしいが。

「さて、僕達の第一試合は何処となのかな？」

僕はそう言いシンヤの方を見た。シンヤはトーナメント表を取り出し、僕達の相手を確認する。

「えっと……お前等は第一回戦第三試合目に二年Bクラスとだ」

「じゃあすぐに試合はあるというわけだね」

「まあな。でも、一時間位は時間があるぞ」

一時間か。長くもなく短くもない中途半端な時間だね。かと言ってただ試合を見ているのはつまらないし……、とりあえず何かをして時間をつぶさないと。

「そうだ、いい忘れてたが選手にはチームごとだが控室があるから、そこを使っていらいそぞ」

そう言いシンヤは控室に行くルートを教えてくれた。僕は音楽を聴きながら、控室に向かった。

2

おや、電気が点いていない。誰も来てないのかな？
そう思いながらドアノブを回す。すると案の定誰も居なかった。

「おやこれは……入れていいのかな？」

僕は控室に置かれている茶葉を見ながら、きよろきよると回りを
見る。恐らく良いと思うのだが…。

「九曲烏龍……、何処かで聞いた覚えが……。ダメだ、思い出
せない」

まあ飲んだら分かると思うが……。

「い、いいよね？ うん、いいさ。いいに決まっている！」

僕は誰もいない部屋でそう呟いている僕は、さぞや怪しい人に見えただろう。まあそんな事はさておき、僕はその後お茶を入れさせてもらった。

「この綺麗な紅の水色……」

僕はそう呟きながら口元にカップを持っていき、紅茶をすする。

「……静かでやさしい味わい………！ 思い出した。九曲紅梅か！ 五、六年前に口にしてから、茶葉すら見てないから忘れていた。しかし……、中華公国でしか販売していない幻の銘茶が何故此処に？」

そう、九曲紅梅は中華公国内でしか販売されていないお茶で、セルシニアでは中華公国幻の三大銘茶の一角として一部の人から絶大な支持を受けている。

しかし何故幻の銘茶が此処に？ 輸入はあり得ないし……、わざわざ買いに行ったとか？ だとしたら、どれだけ金を使っているんだ。安物でも二五グラムで七百リットはくだらないんだぞ。しかもパツと見ても五百グラム以上はあるし、茶葉を見て飲んだから分かるが、かなりいい茶葉の様だし……、恐らく二五グラムで二千五百リットは行くだろう。

「学園長の趣味か？ しかし……、絶対にあの時の教員が此処に置いたんだよな。生徒が入れるように。うわぁ……、哀れ……。今度何かお礼でも送るか」

今頃泣きながら茶葉を探している学園長が目に見えぬ。サラダ油の詰め合わせでも送るかな。

そうこうしている内に一時間ほど経っていた。僕は控室から出て、

闘技場へと向かった。

3

出場選手エントリーが終わっていたらしく、僕以外の五人は全員そろっていた。

「やっと来たかカオル。遅いぞ」

「別に良いだろ？　僕が出場する訳ではないのだし」

今回のトーナメントの試合は、一対一×三人で行うとの事だ。チームは六人。その中から三人を選択して出場させる。先に二勝したら勝ち。しかし第一回戦は三試合すべてを行う。

「で、誰が出るんだい？」

僕はシンに対してそう聞く。

「まず第一戦目がアリアだ。そして二戦目、これは俺が出る。最後はミリア。この三人で初戦は行う事にした」

ふむ、前衛二人が先に出て勝利を狙うと言う事か。ミリアは回復を基本とした後衛。大丈夫なのか？

そんな事を思っていると、二戦目が終わったらしく僕達が入場する事になった。闘技場の盛り上がりはかなりモノも。

『さあ一回戦第三試合！！　戦略を巧みに生かし勝ち残って来た二

年Bクラス！ 戦略が戦術に負ける等あり得ない！！ 最後に笑うのは僕達二年Bクラスだ！！」

こう言う時にしか出番が無い放送部が、大声でそう言う。

『対するは圧倒的な力を見せつけ、サバイバルを勝ち残った一年Sクラス！ 男二人に女が四人。そしてそれらすべてが美女！！ 男の敵め！ 男二人は負けてしまえ！！』

何だそれ…。と言うか今ので闘技場にいた男子の目が変わった様な…。気のせいだ。気のせいだよね？ 気のせいだろう。うん。僕はそう信じる。

『では第一回戦三試合目、第一戦を始めましょう！！』

その声と共に、相手の一人が立ち上がり、舞台に出てきた。

「私が一戦目ね。カオル！ 見ときなさい！！ 相手を軽くひねってあげるから！」

そう言い自信に満ちた表情で、ゲイボルグを手にして、舞台に出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7176r/>

絶対防御の主人公

2011年8月24日14時08分発行